

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第150集

お 小 原 遺 跡 (第三次調査)  
Okobaru Site

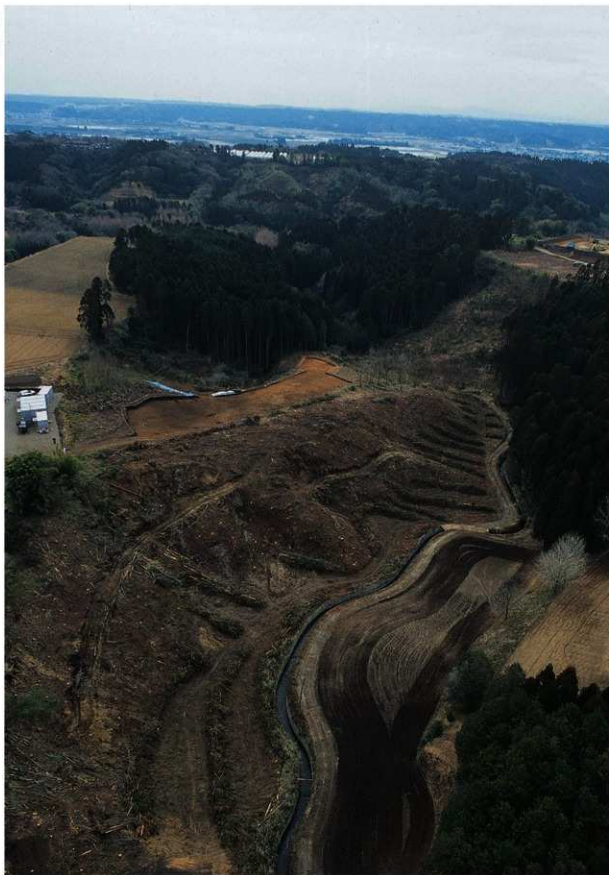
東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 45

2007

宮崎県埋蔵文化財センター



調査区遺跡遠景（西より）



調査区遺跡遠景（北東より）



散礫分布状況全景



散礫分布状況近景



集石遺構分布状況近景

## 序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成 11 年度から実施しております。本書はその発掘調査報告書であります。

本書に掲載された尾小原遺跡（第三次調査）では、縄文時代早期から晩期の遺構・遺物が確認されました。特筆すべきは縄文時代早期の成果です。検出された遺構は多く、集石遺構が 65 基、炉穴が 7 基であります。同時代の一ツ瀬川下流域ではこれだけの遺構が検出された例はなく、該期の拠点的な集落跡であったといえるでしょう。また、遺物についても押型文土器をはじめ多様な土器が出土しています。押型文土器については古いものから新しいものまで幅広く存在し、押型文土器の導入から衰退までの過程を考える上で重要な資料となるでしょう。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びにご指導・ご助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成 19 年 3 月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 清野 勉

## 例 言

1. 本書は、東九州自動車道（都農～西都賀）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した児湯郡新富町所在の尾小原遺跡（第三次調査）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書では日本高速道路公団として記載する。
3. 現地での実測等の記録は島木良浩・岡田 諭・佐竹智光・児玉 幹のほか、高山富雄・杉田康之・山田洋一郎・小山 博・嶋田史子・柳田裕三・土谷崇夫・河野雅人が行い、発掘作業員が補助した。
4. 整理作業は埋蔵文化財センターで行った。実測図の作成及び浄書については、土器は岡田が行い、石器は本センターの藤木 聡が行ったほか、整理作業員が補助した。また、一部の石器は実測図作成と浄書を（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
5. 現地での写真撮影は島木・岡田が行った。また遺物の写真撮影は岡田が行った。
6. 今次調査のグリッド杭設置及び一部の地形測量業務は（株）外ハ測量設計コンサルタントに委託した。空中写真は（株）九州航空に委託した。自然科学分析は（株）古環境研究所に委託した。なお、第V章第1節及び第2節は（株）古環境研究所からの成果報告であるが、レイアウトを一部変更して掲載した。
7. 本書に使用した略記号は次の通りである。  
K-Ah … 鬼界—アカホヤ火口灰 K-Kb … 霧島—小林種石 AT … 始良 Tn 火口灰  
K-Aw … 霧島—アワオコシ K-kw … 霧島—イワオコシ Gr … グリッドライン SI … 集石遺構  
SP … 炉穴 SC … 土坑 SR … 碎片集中箇所 WW. II … 第二次世界大戦
8. 本書に使用した周辺遺跡分布図は国土地理院発行の1/2500地形図をもとに作成した。また遺跡周辺地形図等は日本道路公団宮崎工事事務所から提供の1/1000測量図をもとに作成した。
9. 本書で用いた標高は海拔高であり、方位は座標北（GN）を基本とし、遺構実測図等の一部に磁北を（MN）を用いた。
10. 国土地標は、国土地標第Ⅱ系を基に設定している。
11. 土層及び土器の色澤については農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」に準拠した。
12. 本書の執筆・編集は岡田が担当した。
13. 本遺跡の出土遺物、その他標記記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。



## 本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第II章	遺跡の環境	2
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	2
第III章	調査の経緯と方針	4
第1節	試掘及び確認調査	4
第2節	基本層序	5
第3節	発掘調査の方法と経過	5
1	調査方法と方針	5
2	調査日誌表	7
第4節	整理作業及び報告書作成	7
第IV章	発掘調査の成果	8
第1節	旧石器時代の遺物	8
第2節	縄文時代早期の遺構と遺物	9
1	散礫	9
2	集石遺構	12
3	穴	48
4	土坑	53
5	碎片集中箇所	55
6	土器	57
7	石器	64
第3節	縄文時代中期の遺構と遺物	69
1	集石遺構	69
2	土器	69
3	石器	70
第4節	古墳時代以降の遺物	73
第V章	自然科学分析の結果	74
第1節	放射性炭素年代測定	74
1	試料と方法	74
2	測定結果	74
3	所見	75
第2節	樹種同定	75
1	はじめに	75
2	試料	75
3	方法	75
4	結果	75
第VI章	総括	77
第1節	尾小島遺跡発掘調査成果の概要	77
1	第一次調査成果の概要	77
2	第二次調査成果の概要	77
3	第三次調査成果の概要	77
第2節	尾小島遺跡発掘調査の総括	78
第3節	集石遺構に関する検討	79

## 挿図目次

図1	調査区と周辺地形 (S=1/4,000)	2
図2	周辺森林分布 (S=1/50,000)	3
図3	確認調査トレンチ位置 (S=1/1,000)	4
図4	グリッド配置	5
図5	区割り概念図	5
図6	旧石器時代トレンチ位置	8
図7	旧石器時代遺物	8
図8	散礫分布範囲	10
図9	散礫重量分布グラフ	10
図10	縄文時代早期遺構分布 (S=1/400)	13
図11	縄文時代早期集石遺構1	16
図12	縄文時代早期集石遺構2	17
図13	縄文時代早期集石遺構3	18
図14	縄文時代早期集石遺構4	19
図15	縄文時代早期集石遺構5	20
図16	縄文時代早期集石遺構6	21
図17	縄文時代早期集石遺構7	22
図18	縄文時代早期集石遺構8	23
図19	縄文時代早期集石遺構9	24
図20	縄文時代早期集石遺構10	25
図21	縄文時代早期集石遺構11	26
図22	縄文時代早期集石遺構12	27
図23	縄文時代早期集石遺構13	28
図24	縄文時代早期集石遺構14	29
図25	縄文時代早期集石遺構15	30
図26	縄文時代早期集石遺構16	31
図27	縄文時代早期集石遺構17	32
図28	縄文時代早期集石遺構18	33
図29	縄文時代早期集石遺構19	34
図30	縄文時代早期集石遺構20	35
図31	縄文時代早期集石遺構21	36
図32	縄文時代早期集石遺構22	38
図33	縄文時代早期集石遺構23	39
図34	縄文時代早期集石遺構24	40
図35	縄文時代早期集石遺構25	41
図36	縄文時代早期集石遺構26	42
図37	縄文時代早期集石遺構27	43
図38	縄文時代早期集石遺構28	44
図39	縄文時代早期集石遺構29	45
図40	縄文時代早期集石遺構30	46
図41	縄文時代早期集石遺構31	47
図42	縄文時代早期穴1	48
図43	縄文時代早期穴2	49
図44	縄文時代早期穴3	50
図45	縄文時代早期穴4	52
図46	縄文時代早期土坑1	53
図47	縄文時代早期土坑2	54



図 48	碎片集中箇所位置	55
図 49	碎片分布	55
図 50	縄文時代早期土器 1	57
図 51	縄文時代早期土器 2	58
図 52	縄文時代早期土器 3	59
図 53	縄文時代早期土器 4	60
図 54	縄文時代早期土器 5	61
図 55	縄文時代早期土器 1	65
図 56	縄文時代早期土器 2	66
図 57	縄文時代早期土器 3	67
図 58	縄文時代早期土器 4	68
図 59	SI66	69
図 60	III b 層上面等高線図	69
図 61	縄文時代晚期土器 1	71
図 62	縄文時代晚期土器 2	72
図 63	縄文時代晚期土器 1	72
図 64	縄文時代晚期土器 2	73
図 65	古墳時代中期土器	73
図 66	127mm 重機期鉄砲薬莢	73
図 67	散礫重量分布、土器分布、石器分布	80
挿 表 目 次		
表 1	トレンチの規模と面積	4
表 2	基本層序	5
表 3	旧石器時代の遺物一覧	8
表 4	散礫計量結果	11
表 5	集石遺構一覧	14
表 6	集石遺構計量結果	15
表 7	碎片一覧	56
表 8	縄文時代早期土器一覧	62
表 9	縄文時代早期土器一覧	64
表 10	縄文時代晚期土器一覧	70
表 11	縄文時代晚期土器一覧	70
表 12	尾小原遺跡第三次調査における 樹種可定結果	76
挿 入 写 真 目 次		
写真 1	確認調査風景	6
写真 2	トレンチ調査	6
写真 3	集石遺構調査	6
写真 4	炉穴調査	6
写真 5	礫仮置き状況	9
写真 6	礫一次洗浄	9
写真 7	礫二次洗浄	9
写真 8	C4d 区散礫	9
写真 9	礫計量	9
写真 10	127mm 重機期鉄砲薬莢	73
写真 11	尾小原遺跡第三次調査の炭化材	76
写真 12	尾小原遺跡から望む高千穂峰	80

巻 頭 図 版 目 次	
巻頭図版 1	調査区遠景 (西より)
巻頭図版 2	調査区遠景 (北東より)
巻頭図版 3	散礫分布状況全景
巻頭図版 4	散礫分布状況近景 集石遺構分布状況近景
巻 頭 図 版 目 次	
図版 1	82
C4 区 集石遺構分布 1	C4 区 集石遺構分布 2
図版 2	83
Gr5 付近以北集石遺構分布	
Gr5 付近以南集石遺構分布	
図版 3	84
S44・45・46 検出前	S44・45・46 検出状況
SI 1 配石検出状況	SI 4 配石検出状況
SI10 配石検出状況	SI15 配石検出状況
SI16 配石検出状況	SI22 配石検出状況
図版 4	85
SI24 配石検出状況	SI30 配石検出状況
SI32 配石検出状況	SI37 配石検出状況
SI39 配石検出状況	SI43 配石検出状況
S44 炭化材出土状況	S44 配石検出状況
図版 5	86
SI51 配石検出状況	SI60 配石検出状況
SI31 配石検出状況	SP 1・2 完掘状況
SP 4・7 検出状況	SP 6 半掘状況
SI66 検出状況	III b 層上面調査区全景 (西から)
図版 6	87
押型土器 (山形)	押型土器 (細麻逆櫛目)
押型土器 (粗大櫛目)	
捺糸土器・その他の押型土器	
貝殻条痕土器 1	貝殻条痕土器 2
縄文時代晚期土器 1	縄文時代晚期土器 2
古墳時代中期土器	
図版 7	88
縄文時代早期石鏃	
縄文時代早期副片・スクレイパー	
縄文時代早期石斧	
縄文時代早期石核・二次加工剥片	
縄文時代早期磨石	
縄文時代早期磨石・赤色顔料? 付着石器	
縄文時代晚期磨石・砥石	
縄文時代晚期石鏃	旧石器時代石器

# 第 I 章 はじめに

## 第 1 節 調査に至る経緯

東九州自動車道（都農～西都農）は、平成元年2月に基本計画がなされ、平成9年3月には整備計画路線となっている。さらに、平成9年12月に建設大臣から日本道路公団へ旅行命令が出され、公団では翌年の2月から事業に着手している。その間、県教育委員会では、平成6年度に延岡～西都農間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響が出る部分については工事着手前に、発掘調査を実施することとなった。調査は、平成11年度から県教育委員会が日本道路公団の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターで行っている。なお、新富町内の発掘調査は平成12年度から開始され、平成17年6月を以って完了した。

尾小原遺跡は総面積25,600㎡であり、本調査は三次にわたって行われた。第一次調査は平成13年11月1日～平成14年8月30日にかけて実施され、4,752㎡を調査した。第二次調査は平成15年9月4日～平成16年1月29日にかけて実施され、5,000㎡を調査した。

今回報告する第三次調査範囲は、当初、調査対象ではなかった。しかし、第二次調査時に踏査と試掘を行った結果、斜面中に平坦な地形があり、被熱によると考えられる赤化礫やチャートの剥片が得られたため、遺構・遺物の広がり予想された。この結果を受け、該当する範囲を調査対象面積に追加し、確認調査を行った。期間は平成16年9月8日～10月8日まで、調査面積は400㎡である。詳細は後述するが、縄文時代早期～古墳時代中期の遺構・遺物を確認したため、確認調査地の周辺2,000㎡に対して本調査を行う必要があると判断した（図1）。第三次調査は平成16年12月1日～平成17年5月13日にかけて実施し、整理作業は平成17年6月1日～平成18年5月31日まで行った。

## 第 2 節 調査の組織

尾小原遺跡第三次調査の調査組織は以下のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	宮嶋淳一（平成16・17年度） 清野 勉（平成18年度）
副所長兼総務課長	大瀬和博（平成16年度）
副所長	加藤清郎（平成18年度）
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫（平成16～18年度）
総務課長	宮越 尊（平成17・18年度）
調査第一課長	高山富雄（平成16～18年度）
主幹兼総務係長	石川康史（平成16・17年度）
主幹兼総務担当リーダー	高山正信（平成18年度）
調査第一係長	谷口武範（平成16年度）
主幹兼調査第一係長	長津宗重（平成17年度）
主幹兼調査第一担当リーダー	長津宗重（平成18年度）
主幹兼調査第二係長	長津宗重（平成16年度）
主幹兼調査第三係長	菅付和樹（平成17年度）
主幹兼調査第二担当リーダー	菅付和樹（平成18年度）
主査（調査・調整担当）	島木良浩（平成16・17年度）
主事（調査・報告書担当）	岡田 諭（平成16～18年度）
主事（調査担当）	佐竹智光（平成17年度）
調 査 員	児玉 幹（平成17年度）

### 調査指導（敬称略）

泉 拓良（京都大学）  
小畑昭己（熊本大学）  
田崎博之（愛媛大学）  
広瀬和雄（国立歴史民俗博物館）  
本玉道輝（鹿児島大学）  
柳沢一男（宮崎大学）

調査協力 一ツ瀬川土地改良区

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

尾小原遺跡は児湯郡新富町大字新田 16065-2、16066-1（字尾小原）に所在する。本遺跡の所在する新富町は、宮崎平野のやや中央よりの沿岸部にあって、北側に茶臼原段丘面（海拔約 120m）、三羽原段丘面（海拔約 90m）、新田原段丘面（海拔約 70m）や丘陵を、南部に九州山地に水源をもつツ瀬川の低地が広がる。また、鬼付女川や日置川などの小河川が細長い浸食谷を台地に刻み、東部の海岸地帯に砂丘や遊砂を伴う低地も形成されている。

本遺跡は新田原段丘面に立地する。この段丘面には多くの開析谷が深く入り、段丘の縁辺には開析谷により形成された尾根が多数存在する。今次調査区はこのような尾根の一つに位置し、新田原台地より南西に張り出す尾根からさらに派生する小尾根に立地する。この小尾根の中央付近には平坦面があり、小尾根の西側と南側は開析谷が穿通している。谷を挟んで西には向原第1遺跡が位置する。

### 第2節 歴史的環境

尾小原遺跡（第三次調査）では旧石器時代～古墳時代の遺構・遺物が確認された。調査成果の意義と背景を考えるために、旧石器～縄文時代の歴史的環境を概観する（図2）。

#### 1 旧石器時代

東九州自動車道関連発掘調査以前、新富町内における旧石器時代の資料数は乏しいものであったが、大野寅夫氏の「旧原型細石核」の表録が特筆される。この細石刃核は南九州に分布する細石刃核であり、標識資料として有名である。発掘調査により確認された例では、溜水遺跡では礫群、ナイフ形石器、尖頭器、細石刃、細石刃核などが検出された。また、銀代ヶ道遺跡ではナイフ形石器やラウンドスクレイパー等が出土した。

近年では、東九州自動車道関連発掘調査によって、新富町内においても旧石器時代の資料が増加した。

特に AT 下位の資料が得られたことが大きな成果であり、具体的には、神明寺第1・2、東照寺第2・3、

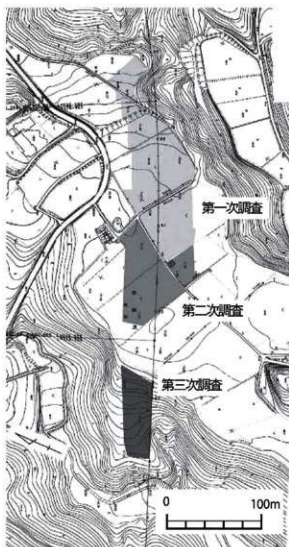
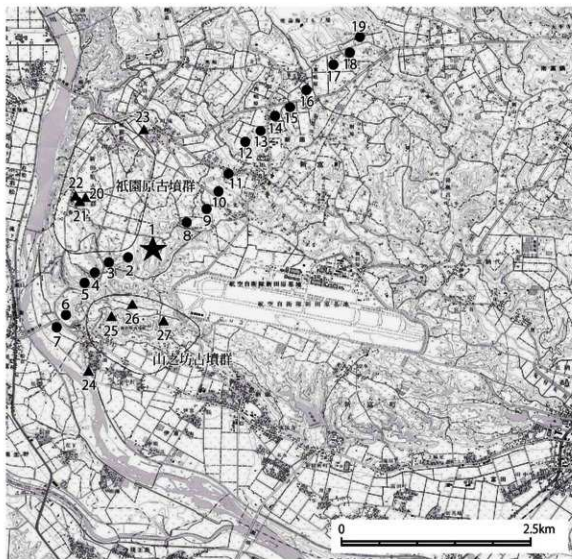


図1 調査区と周辺地形 (S=1/4,000)

西井原第1・2、上新開、尾小原遺跡（第一次調査）で礫群や礫塊石器等を中心とした遺物が出土した。また、石器群は AT 下位の MB2 下部から MB3 では礫塊石器やナイフ形石器・剥片・石核等が多く、AT 直下～Kt-Kb では、剥片石器の量が増加し、石器ブロック等も多く報告されている。

#### 2 縄文時代

新富町内における早期の代表的な遺跡としては、瀬戸口遺跡が挙げられる。この遺跡では集石遺構 23 基が検出され、押型文土器・貝殻条痕文土器及び石鏃や石斧、磨石等の石器が出土した。この他に藤掛遺跡や銀代ヶ道遺跡、七又木遺跡などでも該期の遺構や遺物が確認されている。



【東九州自動車道周辺遺跡】

1. 尾小原遺跡 2. 向原第1遺跡 3. 向原第2遺跡 4. 藤山第1遺跡 5. 藤山第2遺跡 6. 宮ノ東遺跡 7. 宮ノ前遺跡  
 8. 永牟田第2遺跡 9. 永牟田第1遺跡 10. 勘大寺遺跡 11. 一丁目遺跡 12. 上新開遺跡 13. 西牟田第2遺跡  
 14. 西牟田第1遺跡 15. 東牟田第3遺跡 16. 東牟田第2遺跡 17. 東牟田第1遺跡 18. 音明寺第2遺跡 19. 音明寺第1遺跡

【新宮町内遺跡】

20. 瀬戸口遺跡 21. 春日神社横穴遺跡 22. 春日地区遺跡第2地点 23. 川床遺跡 24. 竹洲C遺跡 25. 銀代ヶ道遺跡  
 26. 八幡上遺跡 27. 七又木遺跡

図2 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)

東九州自動車道関連埋蔵文化財発掘調査において早期の遺構・遺物が確認されており、音明寺第1・2、東牟田第2、西牟田第1・2、上新開、勘大寺、永牟田第2、尾小原（第一次、第二次）、向原第1、藤山第1の各遺跡で集石遺構やがらがみ出土され、押型文土器・貝殻条痕文土器、及び石鏝や石斧などの石器類が出土した。

尾小原遺跡に近接する遺跡としては、開析谷を挟んで位置する向原第1遺跡がある。ここでは貝殻条

痕文を主体とする土器群と集石遺構が確認されており、押型文土器主体の尾小原遺跡との関係が注目される。また、藤山第1遺跡では丘陵頂部で貝殻条痕文土器、丘陵尾根部及び低所押型文土器が出土した。それぞれ集石遺構が伴っており、時期によって集石遺構の立地が変化するという特徴がみられた。

晩期の遺構は少ないが、春日遺跡（5次）、尾小原遺跡（第二次）、向原第1遺跡などで該期の孔列文土器・新織痕土器・黒川式土器などが出土している。

### 第三章 調査の経過と方針

#### 第1節 試掘及び確認調査

第二次調査時に行われた踏査と試掘結果を受けて、より具体的な遺構・遺物の残存状況とその範囲、土層堆積状況、及び地形の把握を目的として確認調査を行った。

調査対象地は東北から西南方向へ傾斜する尾根の南半部である。中央付近に平坦面があり、若干南へ延びる。調査対象地の東南部分（高速道路センターラインより東南側）は傾斜が急であることや、林業用道路による削平が認められたため調査対象から除外した。従って、最終的に残った2400㎡を調査対象とし、トレンチを設定した（図3・表1）。1・3・5・6・7Tは等高線に対して直交するように設定し、土層堆積状況の確認を主目的とした。2・4Tは平坦面に設定し、遺構検出と遺構分布の範囲確認を目的とした。

調査手順は、KAh 二次堆積層以上から遺物包含層であるかの確認、KAh 上面で遺構検出、部分的にML1まで掘削して縄文時代早期の遺構検出、の3段階で行った。また、平成15年度試掘トレンチT1とT2を今回調査で再度精査し、トレンチ位置図に加えた。

調査の結果、表土～KAh 二次堆積層までは縄文時代晩期～古墳時代中期の遺物包含層であった。KAh 層上面での遺構検出の結果、4Tで土坑2基が検出され、縄文時代晩期の孔列土器が出土した。他のトレンチでも、部分的にML1まで掘削したところ、5T西側～2Tにかけての範囲で散礫を、4Tで集石遺構1基、楕円押型土器が出土した土坑1基が検出された。

以上の結果から、縄文時代早期と晩期の遺構・遺物の残存が確認できた。晩期の遺構は平坦面に限られ、密度は低い。早期は散礫が平坦面を中心に広範囲に分布すること、集石遺構が多数存在すること、出土した土器から時期は早期中葉であることなどが想定された。5・7Tでは遺構・遺物ともに確認されなかったが、該期の竪穴は斜面に構築する例があり、5・7T周辺も調査する必要が感じられた。

表1 トレンチの規模と面積

確認調査			第二次調査時試掘		
トレンチ	規模 (m)	面積 (㎡)	トレンチ	面積 (㎡)	
1T	30 × 170	510	T1	15 × 50	75
2T	60 × 120	720	T2	15 × 50	75
3T	15 × 90	135	合計		150
4T	60 × 180	1080			
5T	15 × 400	600			
6T	15 × 115	165			
7T	30 × 265	795			
合計		4005			

与 4000

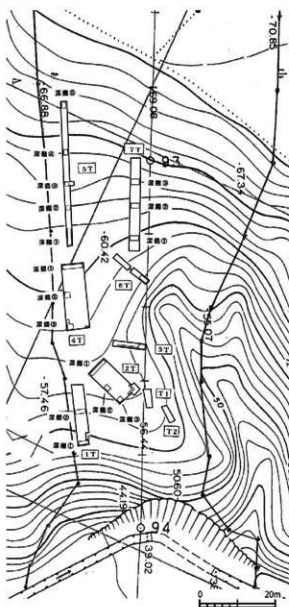


図3 確認調査トレンチ位置 (S=1/1,000)

## 第2節 基本層序

試掘及び確認調査の結果から今次調査区内における基本層序を定めた(表2)。なお、層名は東九州自動車道(都農～西都農)基本層序(宮崎県埋蔵文化財センター2004『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第91集 東九州自動車道(都農～西都農)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書IV』)に準拠している。

V a層を除くI～VI層は調査区全体で確認されており、調査区が立地している尾根の全体において安定的に堆積している。V a層は散礫であるが、他の報告書では「遺構」として扱っているものが多い。今次調査では「層」として認識した。詳細は次章で述べる。VII・VIII層は3・6Iでのみ確認された。他のトレンチでは検出されなかったため、調査区内においては部分的に堆積しているようである。調査区西端の露頭ではXI～XVI層までを確認した。また、段丘礫層が露頭している箇所もあり、段丘礫は人頭大のものから砂利までの砂岩で主に構成されていることがわかった。

## 第3節 発掘調査の方法と経過

### 1 調査方法と方針

調査は2段階に分けて行った。第1段階はIII b層上面までの調査である。I～III a層までを遺物包含層と認定し、層毎に遺物の取り上げを行った。次に、III b層上面で遺構検出を行い、検出した遺構を縮尺1/10で実測した。遺構分布及び等高線図は平板を用い、縮尺1/100で作成した。この際の基準杭は任意で設定し、後で国土座標にあてはめた。第2段階はV a層以下の調査である。まず、III b層とIV層の無遺物部分を重機で除去し、その後、委託によって国土座標に基づいたグリッド(10m×10m)を設定した。グリッド名は第一次・第二次調査から独立して付けており、南北方向のグリッドを西から順にA～I、東西方向のグリッドを北から順に1～9とした(図4)。区画名は北西のグリッド交点の杭名をあてた。区画はさらに四分割して北西をa、北東をb、南西をc、南東をdとした。(図5)。

表2 基本層序

層番号	層名	土色	粘性	硬さ	備考
I	表土	10YR2/1 黒	中	弱	
II	黒色土	10YR2/1 黒	中	中	
III a	K-Ah	5YR5/8 明褐	弱	弱	二次堆積
III b	K-Ah	10YR8/8 黄橙	中	中	一次堆積
IV	MBO	7.5YR3/2 黒褐	中	強	白色粒を密に含む
V a	散礫				
V b	ML1	10YR4/6 褐	中	中	
VI	K-Kb	10YR3/3 暗褐	中	強	小片軽石を密に含む
VII	AT		中	弱	二次堆積
VIII	AT		無	強	軽石状(粗粒)
IX	MB2	10YR2/2 黒褐	中	強	
X	ML3	7.5YR6/8 橙	強	弱	
XI	K-Aw		中	強	
XII	K-aw		中	強	
XIII	粘土層		強	強	
XIV	礫層		無	強	新田原礫層

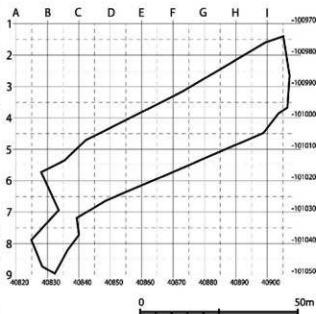


図4 グリッド配置(5=1/1,200)

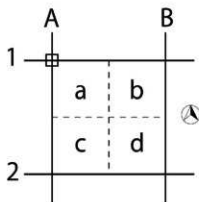


図5 区割り概念図

グリッド杭設置後、同じく委託によって地形測量を行った。次に散礫を検出し、その状況を空中写真(垂直写真)により撮影した。散礫の範囲はを記録し、細分した区画毎に礫を取り上げた。取り上げた礫は遺物の有無を確認した後、赤化礫とそれ以外のものは直径10cmを基準に「大」、「小」の三つに分けてそれぞれ計量した。礫はデジタルカメラを用いて区画毎に撮影し、現地で廃棄した。

集石遺構は検出段階によって分類し、認定した。散礫検出時に認定したもの、散礫除去後に認定したもの、さらに掘り下げて検出したものの3つである。集石遺構の検出面は当時の生活面と一致しているとは限らず、検出時の礫の平面的な位置関係は記録作業の努力に比して得られる情報量が少ないと考えられる。これまでの調査では礫を一つ一つ実測している方法が一般的であったが、今回調査では検出時の礫の状況は垂直写真で撮影し、範囲のみ記録した。断面についても同様の考え方であるが、特に堆積状況を重視した。配石は人為的に配置されたものであり、原位置を保っていることが多いので、平面図と断面見通図を作成した。乱石も含めて構成礫は散礫と同様の方法で計量し、その後現地で廃棄した。

集石遺構の記録終了後、遺構が分布しない箇所にトレンチを設定して好むの検出と旧石器時代の遺構と遺物の確認を行った。

遺構写真は主に35mmフィルムカメラを用いて、モノクロ・カラーリバーサル・カラーの3種を撮影し、デジタルカメラも補助的に利用した。また、特に重要な遺構や集石遺構の分布状況などは中判カメラを用いて撮影した。

包含層遺物については光波トランシットを用いて三次元座標を与えて一点ずつ取り上げた。また、今回調査では集石遺構の周囲に大きめの礫が点在していたが、これらの礫には明確な使用痕はないものの、集石遺構との位置関係から関連性があるものと考え、遺物として取り上げた。



写真1 確認調査風景



写真2 トレンチ調査



写真3 集石遺構調査



写真4 炉穴調査



## 2 調査日誌抄

### 【確認調査】

平成 16 (2004) 年

- 0727 調査対象地現況確認。
- 0902 竹木等刈払い業務委託開始 (～09.03)。
- 0903 リース物件搬入。
- 0908 重機投入 (～09.10)。
- 0909 作業員初日。トレンチ設定 (1～5T) 及び掘削開始。堆積状況の確認。
- 0910 表土～KAh 二次堆積層にかけて、縄文時代早期～晩期の遺物、赤化礫出土。
- 0915 二次調査時試掘トレンチ T1・T2 再調査。
- 0917 KAh 下層確認開始。集石遺構検出。
- 0921 トレンチ追加 (6・7T)。遺構・遺物なし。
- 0927 4T の M80 で榎木型土器出土。
- 1001 トレンチ断面撮影。トレンチ配置図作成。
- 1014 埋戻し。リース物件返却。確認調査終了。

### 【本調査 (第三次)】

平成 16 (2004) 年

- 1201 調査開始。重機掘削 (～12.03)。
- 1202 リース物件搬入及び設置 (～12.07)。
- 1206 作業員初日。包含掘削及び遺構検出作業。風倒木痕と小穴 (樹洞) 多し。
- 1214 略図作成。調査区輪郭・掘削・遺構の記録。
- 1220 地形測量図作成 (～12.22)。
- 1221 遺構実測 (集石遺構 1 基)。
- 1222 調査区全景写真撮影。
- 1224 重機掘削。無遺物層除去 (～12.28)。

平成 17 (2005) 年

- 0105 地形測量業務委託 (～01.07)。
- 01.11 縄文時代早期調査開始。散礫検出作業。碎片集中箇所 2 箇所確認。
- 0206 空中写真撮影業務委託。
- 0208 散礫処理の記録。  
散礫除去及び集石遺構検出作業開始。
- 0302 集石遺構写真撮影及び実測開始。
- 0303 平成 15 年度試掘トレンチ再発掘。
- 0308 職員 2 人体制。
- 0315 GrG 以東の斜面上にトレンチ 3 本設定。K-Kb 上面まで掘削。遺構・遺物無し。

散礫除去完了。

0322 重機による排土移動 (～03.25)。

発掘調査と工事の調整会議。平成 17 年 5 月 13 日までの調査期間延長。調査と工事の同時進行。埋戻しについて道路公団・工事業者・当センター職員の三者で協議。

0325 炉穴 1 基検出。

0405 平成 17 年度継続調査開始。

0414 散礫計量完了。総重量 11815.5kg。

0415 トレンチ調査 (炉穴の検出及び下層の確認)。C7 区 VI 層から旧石器時代の剥片出土。集石遺構構成礫計量開始。

0510 集石遺構構成礫計量完了。総重量 6266.0kg

0512 撤収作業。作業員最終日。

0513 リース物件撤去。調査完全終了。

## 第 4 節 整理作業及び報告書作成

遺物はコンテナ箱数にして、確認調査 1 箱、本調査 16 箱であった。遺物は現場事務所内で洗浄し、注記以降の作業をセンターで行った。遺物の整理作業はセンターで行い、石器のうち剥片石器等 44 点については実測とデジタルトレースを委託した。

当センターでは、平成 18 年度から一部の報告書をデジタル方式で作成することになった。本報告書もデジタルデータを入稿した。使用 OS は Windows2000professional である。遺物・遺構平面図等のトレースについては株式会社アイシン精機の『遺構くん』を、一部 Adobe 社の Illustrator を使用し、eps 形式で保存、レイアウトを行った。編集・レイアウトについては Adobe 社の InDesign を用いた。入稿に際しては InDesign 形式での入稿を行い、印刷に際して PDEX-1a による出力を行った。

なお、巻頭及び巻末図版の写真は、印刷紙にプリントしたものを版下として入稿した。

## 第IV章 発掘調査の成果

### 第1節 旧石器時代の遺物

今次調査における旧石器時代の調査は、縄文時代早期の調査が終了した場所から順次トレンチを設定した(図6)。広範囲にトレンチをあけたが、遺構の検出はなく、C6区トレンチのVI層から剥片が2点出土したのみであった(図7-2、3)。遺物の出土状況に特徴はなく、また、開析谷に向かう斜面に近いことから、原位置を保っていない可能性が高い。第VI層は全てのトレンチで確認されており、現在の尾根の斜面と同じ角度で傾斜して堆積していることから、

当時の地形は現在とほぼ同じであったと考えられる。なお、出土位置・層位は不明であるが、角錐状石器が1点(図7-1)確認されている。この石器の特徴を挙げると、基部側に礫面が残り、先端側に裏面調整がされている。素材は横長剥片であり、全体的に扁平である。以上の特徴から、旧石器時代の石器であると考えられる。

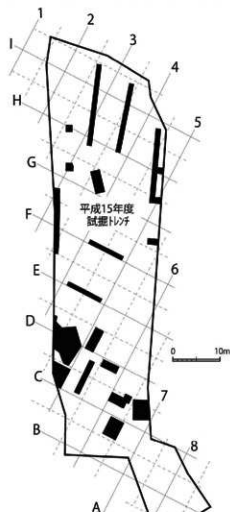


図6 旧石器調査トレンチ位置(S=1/800)

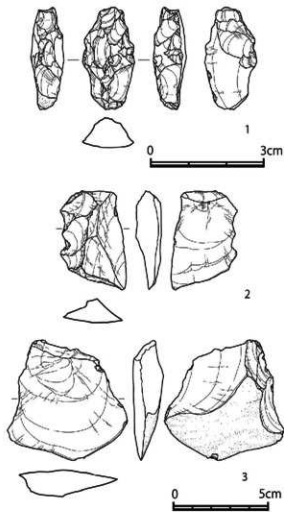


図7 旧石器時代遺物(1はS=1/1、2、3はS=1/2)

表3 旧石器時代遺物一覧

遺物 番号	出土位 置(区)	層	石 材	最大値(cm)			重量 (g)	器 種	観察所見	実測 番号	注記
				長	幅	厚					
1	不明	不明	燧/木津産黒曜石	0.7	1.4	0.9	2.8	角錐状石器	稜上調整あり	41	対VI/33
2	C6	VI	燧/礫	6.4	6.4	1.7	52.8	剥片		29	対VI/3C7 HVI-1
3	C6	VI	燧/礫	5.2	3.5	1.4	21.4	剥片		30	対VI/3C7 HVI-2

## 第2節 縄文時代早期の遺構と遺物

### 1 散磔

#### 【基本的な考え方】

Ⅲb層(KAh一次堆積)とⅣ層(MBO)無遺物部分の除去後に、いわゆる「散磔」が検出された。散磔は解釈や記録方法が多様であり、問題点もある。唐木戸第4遺跡の成果(宮崎県埋蔵文化財センター2005『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第126集 唐木戸第4遺跡』)では、調査担当者からこれまでの調査例をふまえた現時点での見解が提示された。今次調査ではこの見解に則り、散磔を遺構ではなく「層」と認識して調査した。なお、散磔中から出土した遺物は包含層遺物として認定した。

#### 【取上、洗浄、計量、廃棄】

記録方法については、第Ⅲ章第3節で若干ふれたが、ここでは取上げ以後の工程について詳述する。なお、集石遺構も同様の工程で処理を行った。

取り上げた磔は、調査区外の空き地で取上区画に対応する区画を設定し、仮置きをした(写真5)。磔には土が強く付着していたため、まず、コンプレッサーを用いて一次洗浄を行い(写真6)、その後、作業員が束子を用いて洗浄した(二次洗浄 写真7)。この際、磔の分類基準を作業員に教え、調査員指導の下、「赤化磔」、赤化磔以外の「大」・「小」の3つに分類した。分類毎に磔を集め、調査員が遺物の有無を確認し、遺物があれば取上げ区画毎に回収した。次に磔を集積した状態で箱尺を置き、デジタルカメラで撮影した(写真8)。撮影後、体重計と遺物用コンテナを写真9のように設置して計量を行った。計量の際は、作業員の安全面を考慮し、一度に載る重さを25kg以下に抑えた。最終的に、工事の処分場にならないよう、磔を広げて遺跡内に廃棄した。

今回のような方法をとることができたのは、調査環境に大きく起因する。すなわち、水を大量に利用して効率よく磔を洗浄することが可能であったこと、調査区外に広い作業場が確保できたこと、が挙げられる。今回は調査方法の具体例の一つとして提示したい。



写真5 磔仮置き状況



写真6 磔一次洗浄



写真7 磔二次洗浄



写真8 C4d区散磔



写真9 磔計量

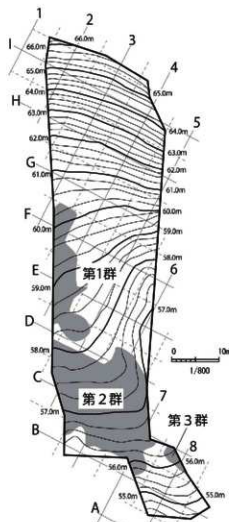


図8 散礫分布範囲 (S=1/800)

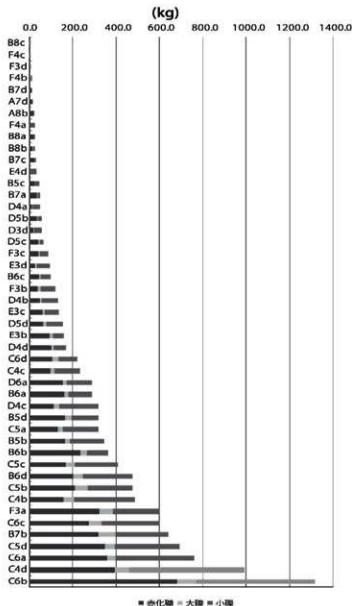


図9 散礫重量分布グラフ

#### 【計量結果】

散礫の分布範囲を示したのが図8中のトーン部分である。「層」としてある程度の厚さが認められた範囲を散礫の範囲として認定した。ただし、散礫の範囲外にも礫が疎らに分布しており、これらは区画毎に取り上げて計量した(表4)。

第1群は尾根の中央部分に分布する。東側の斜面の傾斜が緩くなり、平坦面にさしかかるあたりから礫の分布が始まる。東側斜面では礫は1点もなく、第1群の礫は斜面の高所から流れ落ちたものとは考

え難い。第1群中最大重量はF3a区である。

第2群は尾根平坦部から西側斜面に向かって分布する。礫重量はC4d区とC6b区が群を抜いており、第2群の中心と言える。第2群の礫重量はこの2区画から西側斜面に向かって徐々に減少する。

なお、D5a区は礫分布の空白域である。この区画では直径約2mの抜根による攪乱があり、分布していた礫はその影響を強く受けていると考えられるため、礫を取り上げなかった。

表 4 散礫計量結果

地区	散 礫 (kg)				土 石 器	備 考
	総量	小 礫	大 礫	赤 礫		
G6b	1319.0	547.0 (41%)	89.0 (7%)	683.0 (52%)	○	尾鈾山酸性岩礫少量
C4d	991.0	529.0 (53%)	69.0 (7%)	393.0 (40%)	○	尾鈾山酸性岩礫(小礫・赤礫)少量
G6a	760.0	364.0 (48%)	35.0 (5%)	361.0 (48%)		
C5d	693.5	300.0 (43%)	46.0 (7%)	347.5 (50%)		
B7b	639.5	244.0 (38%)	77.0 (12%)	318.5 (50%)		
C6c	600.0	265.5 (44%)	63.0 (11%)	271.5 (45%)	○	
F3a	598.0	212.0 (35%)	65.0 (11%)	321.0 (54%)	○	
C4b	486.0	280.0 (58%)	48.0 (10%)	158.0 (33%)		
C5b	476.0	205.5 (43%)	60.5 (13%)	210.0 (44%)		
B6d	474.5	226.0 (48%)	45.5 (10%)	203.0 (43%)	○	
C5c	407.5	197.0 (48%)	43.5 (11%)	167.0 (41%)		
B6b	361.5	95.5 (26%)	30.0 (8%)	236.0 (65%)		
B5b	346.0	157.5 (46%)	23.5 (7%)	165.0 (48%)		
C5a	319.5	167.0 (52%)	22.5 (7%)	130.0 (41%)		
B5d	316.5	121.0 (38%)	32.0 (10%)	163.5 (5%)		
D4c	316.5	178.0 (56%)	24.5 (8%)	114.0 (36%)		
B6a	288.0	110.0 (38%)	18.0 (6%)	160.0 (56%)		
D6a	287.5	114.5 (40%)	20.0 (7%)	153.0 (53%)		
C4c	231.5	117.0 (51%)	16.0 (7%)	98.5 (43%)		
C6d	219.5	85.0 (39%)	29.0 (13%)	105.5 (48%)		
D4d	170.0	58.0 (34%)	12.0 (7%)	100.0 (5%)		
E3b	159.0	51.5 (32%)	15.0 (9%)	92.5 (58%)		
D5d	153.5	75.0 (49%)	15.0 (10%)	63.5 (4%)		
E3c	133.0	62.0 (47%)	11.5 (9%)	59.5 (4%)		尾鈾山酸性岩礫少量
D4b	131.5	77.0 (59%)	4.0 (3%)	50.5 (38%)		
F3b	118.0	67.0 (57%)	13.5 (11%)	37.5 (32%)	○	尾鈾山酸性岩礫少量
B6c	96.5	43.5 (45%)	8.5 (9%)	44.5 (46%)		
E3d	95.0	63.0 (66%)	6.0 (6%)	26.0 (27%)		
F3c	84.5	37.0 (44%)	6.5 (8%)	41.0 (49%)	○	尾鈾山酸性岩礫少量
D5c	65.0	15.5 (24%)	7.0 (11%)	42.5 (65%)		尾鈾山酸性岩礫少量
D3d	57.5	33.5 (58%)	6.5 (11%)	17.5 (30%)		
D6b	55.0	19.0 (35%)	4.0 (7%)	32.0 (58%)		
D4a	50.0	35.0 (70%)	5.0 (10%)	10.0 (20%)		
B7a	48.0	10.5 (22%)	4.5 (9%)	33.0 (69%)		
B5c	44.5	20.5 (46%)	3.0 (7%)	21.0 (47%)		
E4d	33.5	29.0 (87%)	2.0 (6%)	2.5 (7%)	○	尾鈾山酸性岩礫少量
B7c	31.0	7.5 (24%)	0.0 (0%)	23.5 (76%)		
B8b	26.5	6.0 (23%)	4.0 (15%)	16.5 (62%)		
B8a	25.5	6.5 (25%)	1.5 (6%)	17.5 (69%)		
F4a	25.0	22.0 (88%)	0.0 (0%)	3.0 (12%)	○	尾鈾山酸性岩礫少量 赤色頁岩1個
A8b	22.5	4.5 (20%)	0.0 (0%)	18.0 (80%)		
A7d	13.5	3.5 (26%)	0.0 (0%)	10.0 (74%)		
B7d	11.0	3.0 (27%)	0.0 (0%)	8.0 (73%)		
F4b	10.0	4.0 (40%)	4.5 (45%)	1.5 (15%)		
F3d	8.5	2.0 (24%)	4.5 (53%)	2.0 (24%)	○	
F4c	8.0	3.5 (44%)	4.0 (50%)	0.5 (6%)		
B8c	7.5	2.5 (33%)	0.0 (0%)	5.0 (67%)		
合計	11815.0	5277.5 (45%)	999.5 (8%)	5538.0 (47%)		

## 2 集石遺構

この項では、集石遺構の調査方針（第三章第3節1で既述）について具体的に述べ、調査上の所見と表5の記録を行う。

### 【集石遺構範囲の認定】

今回調査における集石遺構の範囲については認定基準を述べる。検出時に認定した集石遺構は、礫が散漫に分布している部分を散礫の範囲とし、礫が密集している部分を集石遺構の範囲と認定した。散礫下に存在する集石遺構は、散礫を一枚一枚剥がすように除去し、礫の密集部分が確認された段階で、その密集部分を集石遺構の範囲として認定した。

### 【従前の検出状況の記録方法と他の遺構の記録方法】

従前、集石遺構の分類基準は掘込みの有無・配石の有無が主体である。礫の平面的な分布状況は、密度（密か散漫か）が副次的に用いられたに過ぎず、個別の礫に対する分析はされていない。

他の遺構（竪穴住居跡や土坑等）の記録方法を参照すると、検出状況は写真のみであり、完結状況を図化する。これらの遺構は「土」によって埋没しており、検出面を削平しても遺構の輪郭線が少し変化する程度である。集石遺構は「礫」によって埋没しているため、礫を一つ一つ描く場合、上部が削平されれば、その度合いによって図が異なる。

### 【平面の記録方法】

検出面における礫個別の位置関係は分類基準の主体ではない。また、集石遺構は散礫下で検出されたものが多く、他の遺構の記録方法も参考にすれば、検出状況の記録も写真のみで充分であろう。

### 【断面の記録方法】

集石遺構は石蒸し料理に用いる調理施設であるという解釈が一般的である。調理中は集石遺構内に食物や礫が充填されているが、これらのものは調理後に掻き出される。内部に食物を残したまま集石遺構が遺棄される可能性は極めて低いため、遺跡で検出された集石遺構内部の礫は調理後に堆積したものであろう。従って、今回調査における集石遺構の断面記録は、礫の堆積状況は写真により、埋没過程は分層線を描いた断面図によって記録した。

### 【配石の記録方法】

集石遺構の底面、あるいは壁面に礫が配置された状況が認められた場合、配石であると認定した。配石は人為的に配されたものであり、また、礫の位置関係から分類することも可能であり、分析対象として有効である。従って、配石については検出状況を写真撮影し、平面図には礫を一つ一つ描き、断面見直し図（一方向）を作成した。

### 【調査中の所見】

調査区の地形は小尾根の端部である。平坦面を中心に集石遺構 65 基、炉穴 7 基、土坑 3 基、石器碎片集中 2 箇所が特徴的に分布していた（図 9）。

以下に集石遺構に関する調査中の所見を挙げる。

①集石遺構はある程度のまとまりをもって分布  
具体的な群の認定は難しいが、C4d 区と C6d 区にまとまりが見られる。これらの中心には大型（掘込みの直径約 2m）かつ礫石を有する集石遺構があり、その周辺に小規模の集石遺構が分布する。また、これらの集石遺構はほとんど重複することなく分布するという特徴がある。

### ②集石遺構の周囲に大き目の礫が点在

集石遺構の周囲に大き目の礫が点在していた。明確な使用痕はないが、遺物の可能性もある。

### ③遺構がない空間の存在

①に挙げた集石遺構の群の間には遺構がない空間が存在する。この空間に遺構はないが、散礫が分布し、わずかながら遺物も包含されていた。

### ④集石遺構と他の遺構の分布

集石遺構・炉穴・土坑は尾根中央部附近の平坦地のみ分布する。GrE と GrA の交点から東南部分及び GrG 以東は急斜面であり、遺構は分布しない。また、E5 区・D5d 区は緩斜面だが、石器碎片の集中箇所があり、集石遺構の分布範囲と重複しない。集石遺構と炉穴の関係であるが、重複していたのは SP31 と SP3 のみである。断面観察の結果、SP31 が古く、SP3 が新しいことが判明した。

### 【出土遺物と炭化物・炭化材】

集石遺構から出土した土器・石器・炭化材は小破片が多く、量は少ない。遺構内部の礫に混じて出土しており、原位置は保っていない。

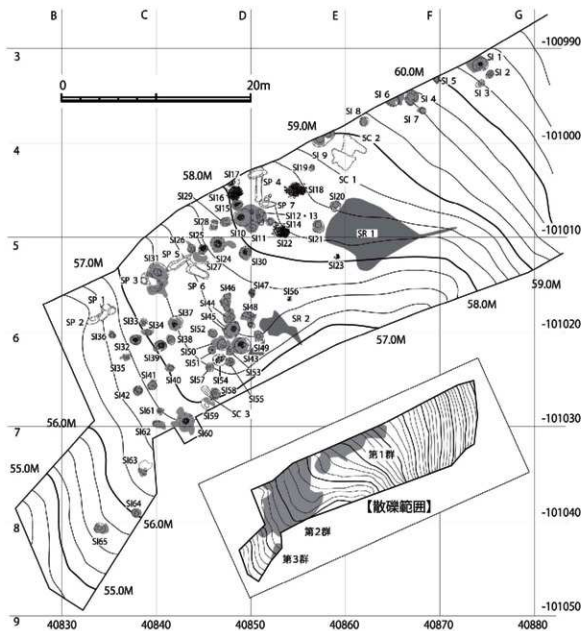


図10 縄文時代早期遺構分布 (S=1/400)

【集石遺構一覧表の説明】

- 旧遺構番号…調査中に付与した番号である。実測図・写真・遺物目録はこの番号が使われている。
- 検出段階…aは散磔検出時、bは散磔除去後、cはさらに掘り下げた段階で検出したもの。
- 地区…集石遺構の中心または面積的に広く位置している地区である。
- 磔範囲…磔範囲が収まる面積。「( )」内は付風土坑の数値、「>」は「以上」を示す。
- 掘込み…長軸を基準に直行する軸の内最長のものを短軸とする。深さは最高所と最低所の差である。

- 磔総重量…内部磔と配石の合計重量の総計である。
- 内部磔…「( )」内の数値は内部磔・配石のそれぞれの合計に占める割合である。
- 炭化材…○は検出されたことを示す。◎は自然科学分析に出した資料を示す。
- 遺物…「土」は土器、「石」は石器を示す。

【掲載遺構図について】

平面図のトーン部分は磔範囲を示す。また、掲載遺構図には従来の方法で記録したものが一部ある。今回提示した記録方法との比較のために掲載した。



表5 集石遺構一覽

新遺構 番号	旧遺構 番号	検出 段階	地区	埋藏用(m)		掘込み(m)			配石	炭化材	遺物
				長辺	短辺	長軸	短軸	深さ			
S01	S201	b	F3a	2.145	>1.655	1.710	1.410	0.390	○		
S02	S202	b	F3b	0.990	0.825	0.990	0.570	0.150			
S03	S203	b	F3a	0.750	0.645	1.020	0.660	0.210			
S04	S205	b	E3d	1.800	1.440	1.680	1.335	0.345		○	
S05	S204	b	E3b	>0.930	>0.675	>0.675	0.660	0.105			
S06	S206	b	E3d	2.280	1.200	1.590	>1.020	0.210			土
S07	S207	b	E3d	0.945	0.825	0.720	0.690	0.120			土
S08	S208	b	E3c	0.960	0.795	1.005	0.960	0.210			土
S09	S209	b	D3d	2.550	1.110	2.640	>1.230	(0.195)0.210			石
S10	S218	b	C4d	3.495	3.000	(1.800)1.980	(1.545)1.860	(0.330)0.330	○	○	土石
S11	S304	c	D4c	0.720	0.525	0.750	0.630	0.180			
S12	S301	c	D4c	1.215	0.780	0.630	0.645	0.180		○	
S13	S302	c	D4c	1.215	0.780	0.570	0.420	0.135		○	
S14	S303	c	D4	1.050	0.840	1.050	0.840	0.150			土石
S15	S216	b	C4d	1.230	1.050	1.260	1.050	0.285	○		
S16	S214	b	C4d	1.830	1.695	1.560	1.200	0.510	○	○	
S17	S305	c	C4b	計測せず	計測せず	>1.845	>0.840	0.600	○		
S18	S102	a	D4c	2.430	1.740	1.110	1.050	0.270			石
S19	S101	a	D4b	0.585	0.480	0.720	0.465	0.150			
S20	S210	b	D4d	1.290	1.170	1.155	1.140	0.135			土
S21	S211	b	D4d	1.380	1.200	1.320	1.260	0.195			石
S22	S213	b	D4c	1.935	1.515	1.270	1.200	0.360	○		
S23	S103	b	D5b	1.280	1.180	0.000	0.000	0.000			石
S24	S104	a	C5b	(1.170)1.740	(0.810)1.650	(1.170)1.740	(0.810)1.650	(0.180)0.405	○		
S25	S105	a	C5a	1.050	0.960	1.050	0.960	0.150	○		土
S26	S106	a	C5a	1.590	0.855	0.825	0.840	0.150			土
S27	S246	b	C5a	1.650	1.080	1.740	1.200	0.240			土
S28	S231	b	C4d	1.110	0.915	1.200	0.780	0.210			土
S29	S217	b	C4d	1.110	1.050	1.260	0.870	0.345			土石
S30	S215	b	C5b	1.455	1.380	1.500	1.290	0.360	○		土
S31	S236	b	B5b	3.930	2.010	2.385	>1.680	0.585	○	○	土
S32	S121	a	B6b	1.370	1.120	1.200	1.060	0.300	○		土
S33	S239	b	B5d	0.825	0.750	0.825	0.750	0.255			石
S34	S240	b	B6b	1.320	0.730	1.040	0.660	0.130			
S35	S245	b	B6b	1.140	0.885	0.810	0.540	0.105			
S36	S108	a	B5d	0.990	0.435	0.750	0.645	0.090			土
S37	S238	b	C5c	1.500	1.470	1.650	1.500	0.435			土石
S38	S219	b	C6a	1.155	1.005	0.915	0.780	0.285			土
S39	S220	b	C6a	1.500	1.155	1.455	1.065	0.195	○	○	土石
S40	S221	b	C6a	1.080	0.915	1.080	0.870	0.180			
S41	S229	b	B6d	1.320	1.065	0.930	0.900	0.240			
S42	S228	b	B6d	1.170	1.140	1.005	0.840	0.180			
S43	S233	b	C6b	1.950	1.755	1.710	1.650	0.330	○	○	石
S44	S112	a	C5d	2.205	1.830	1.800	1.500	0.390	○	○	土
S45	S232	b	C5d	1.590	1.230	1.200	1.080	0.135			土
S46	S113	a	C5d	2.100	1.470	2.010	0.990	0.150			土石
S47	S109	a	C5d	0.450	0.320	0.460	0.360	0.020	○		
S48	S111	a	C5d	1.950	1.800	(0.750)1.380	(0.540)0.630	(0.060)0.210			土
S49	S243	b	D6a	1.140	0.960	1.200	1.005	0.120			土
S50	S234	b	C6b	1.620	1.575	1.200	0.900	0.135			土
S51	S235	b	C6b	0.900	0.780	0.825	0.750	0.420			土
S52	S244	b	C5d	1.125	0.900	0.975	0.900	0.210			土
S53	S114	a	C6b	1.665	0.810	0.990	0.855	0.090			
S54	S223	b	C6b	1.380	0.750	1.470	1.230	0.195			石
S55	S224	b	C6b	1.050	1.020	0.915	0.810	0.240			
S56	S119	a	D5c	1.500	1.030	0.000	0.000	0.000			
S57	S230	b	C6a	1.005	0.990	0.960	0.780	0.135			土石
S58	S222	b	C6d	1.410	1.230	0.960	0.930	0.255			石
S59	S242	b	C6c	1.320	0.480	1.470	1.185	0.180			土
S60	S116	a	C6c	3.240	2.400	1.680	1.695	0.390	○		土石
S61	S241	b	C6c	0.915	0.810	0.765	0.450	0.075			
S62	S117	a	C6c	1.650	1.050	0.840	>0.315	0.135			石
S63	S225	b	B7b	>0.810	>1.050	>0.585	>0.720	>0.285			土
S64	S226	b	B7d	1.065	1.020	1.030	0.915	0.135			
S65	S118	a	B8a	1.590	1.200	1.230	1.050	0.165			

表6 集石遺構計量結果

遺構 番号	総重量 (kg)				配石重量 (kg)				備考
	合計	小礫	大礫	赤化礫	合計	小礫	大礫	赤化礫	
S101	449.5	433.5	355.5 (82%)	7.0 ( 2%)	71.0 ( 16%)	16.0		16.0 ( 100%)	
S102	10.5	10.5	2.5 (24%)		8.0 (76%)				
S103	12.0	12.0	4.0 (33%)	1.0 ( 8%)	7.0 (58%)				
S104	234.5	234.5	59.5 (25%)	19.5 ( 8%)	155.5 (66%)				
S105	30.0	30.0	10.0 (33%)		20.0 (67%)				
S106	50.0	50.0	17.5 (35%)	2.0 ( 4%)	30.5 (61%)				
S107	19.0	19.0	6.0 (32%)		13.0 (68%)				
S108	12.0	12.0	2.0 (17%)		10.0 (83%)				
S109	46.0	46.0	25.5 (55%)	4.0 ( 9%)	16.5 (36%)				
S110	366.0	350.5	170.0 (49%)	32.0 ( 9%)	148.5 (42%)	15.5		15.5 (100%)	
S111									計量せず
S112	17.0	17.0	7.0 (41%)		10.0 (59%)				S13と結合
S113									S12と結合
S114									計量せず
S115	90.5	78.0	27.0 (35%)	6.0 ( 8%)	45.0 (58%)	12.5	1.5 (12%)	7.0 (56%)	4.0 (32%)
S116	364.0	320.5	120.0 (37%)	58.0 (18%)	142.5 (44%)	43.5		4.5 (10%)	39.0 (90%)
S117									
S118	241.5	241.5	44.0 (18%)	36.5 (15%)	161.0 (67%)				
S119	14.5	14.5	8.0 (55%)	2.5 (17%)	4.0 (28%)				
S120	4.0	4.0	1.0 (25%)		3.0 (75%)				
S121	14.0	14.0	5.0 (36%)	2.0 (14%)	7.0 (50%)				
S122	283.0	248.0	46.0 (19%)	21.0 ( 8%)	181.0 (73%)	35.0		1.0 ( 3%)	34.0 (97%)
S123	27.0	27.0	1.0 ( 4%)	1.0 ( 4%)	25.0 (93%)				
S124	469.0	414.0	128.0 (31%)	40.0 (10%)	246.0 (59%)	55.0			55.0 (100%)
S125	80.0	61.5	14.0 (23%)	10.0 (16%)	37.5 (61%)	18.5	2.5 (14%)	3.5 (19%)	12.5 (68%)
S126	67.5	67.5	24.0 (36%)	7.0 (10%)	36.5 (54%)				
S127	27.0	27.0	11.5 (43%)	4.5 (17%)	11.0 (41%)				
S128	15.0	15.0	8.0 (53%)	1.0 ( 7%)	6.0 (40%)				
S129	67.5	67.5	27.5 (41%)	2.5 ( 4%)	37.5 (56%)				
S130	151.0	138.5	76.0 (55%)	15.5 (11%)	47.0 (34%)	12.5		1.0 ( 8%)	11.5 (92%)
S131	204.5	158.5	43.5 (27%)	20.0 (13%)	95.0 (60%)	46.0	1.0 ( 2%)	7.0 (15%)	38.0 (83%)
S132	71.5	58.5	17.0 (29%)	15.5 (26%)	26.0 (44%)	13.0	5.0 (38%)		8.0 (62%)
S133	39.5	39.5	1.5 ( 4%)		38.0 (96%)				
S134	26.5	26.5	5.0 (19%)	4.5 (17%)	17.0 (64%)				
S135	27.5	27.5	1.0 ( 4%)	2.5 ( 9%)	24.0 (87%)				
S136	17.5	17.5	7.5 (43%)	1.0 ( 6%)	9.0 (51%)				
S137	134.5	117.5	47.5 (40%)	3.0 ( 3%)	67.0 (57%)	17.0		2.0 (12%)	15.0 (88%)
S138	27.0	27.0	8.5 (31%)	1.5 ( 6%)	17.0 (63%)	0.0			
S139	128.0	82.0	19.0 (23%)	6.0 ( 7%)	57.0 (70%)	46.0	2.0 ( 4%)	8.0 (17%)	36.0 (78%)
S140	83.5	83.5	44.0 (53%)		39.5 (47%)				
S141	43.0	43.0	19.5 (45%)	1.5 ( 3%)	22.0 (51%)				
S142	72.5	72.5	17.5 (24%)	7.0 (10%)	48.0 (66%)				
S143	253.5	253.5	85.5 (34%)	23.5 ( 9%)	144.5 (57%)				
S144	419.0	399.5	120.5 (30%)	69.5 (17%)	209.5 (52%)	19.5			19.5 (100%)
S145	121.0	121.0	18.0 (15%)	3.5 ( 3%)	99.5 (82%)				
S146	111.0	111.0	27.0 (24%)	11.5 (10%)	72.5 (65%)				
S147	4.5					4.5	0.5 (11%)		4.0 (89%)
S148	20.5	20.5	2.0 (10%)		18.5 (90%)				
S149	8.5	8.5	4.5 (53%)		4.0 (47%)				
S150	12.5	12.5	3.0 (24%)	1.5 (12%)	8.0 (64%)				
S151	79.0	55.5	13.0 (23%)	6.5 (12%)	36.0 (65%)	23.5			23.5 (100%)
S152	9.5	9.5	4.5 (47%)		5.0 (53%)				
S153	20.0	20.0	6.0 (30%)	3.0 (15%)	11.0 (55%)				
S154	4.0	4.0			4.0 (100%)				
S155	31.0	31.0	5.0 (16%)	3.0 (10%)	23.0 (74%)				
S156	19.0	19.0	1.0 ( 5%)	3.5 (18%)	14.5 (76%)				
S157	23.5	23.5	6.0 (26%)		17.5 (74%)				
S158	36.5	36.5	5.5 (15%)		31.0 (85%)				
S159	28.5	28.5	8.0 (28%)	2.5 ( 9%)	18.0 (63%)				
S160	436.5	399.0	158.5 (40%)	63.0 (16%)	177.5 (44%)	37.5			37.5 (100%)
S161	19.5	19.5	9.0 (46%)	2.5 (13%)	8.0 (41%)				
S162	26.5	26.5	4.5 (17%)		22.0 (83%)				
S163	35.0	35.0	2.0 ( 6%)		33.0 (94%)				
S164	23.5	23.5	7.0 (30%)	2.0 ( 9%)	14.5 (62%)				
S165	486.0	486.0	178.0 (37%)	28.0 ( 6%)	280.0 (58%)				
合計	6266.0	5850.5	2100.5 (36%)	559.0 (10%)	3191.0 (55%)	415.5	12.5 ( 3%)	34.0 ( 8%)	369.0 (89%)

【SI 1】

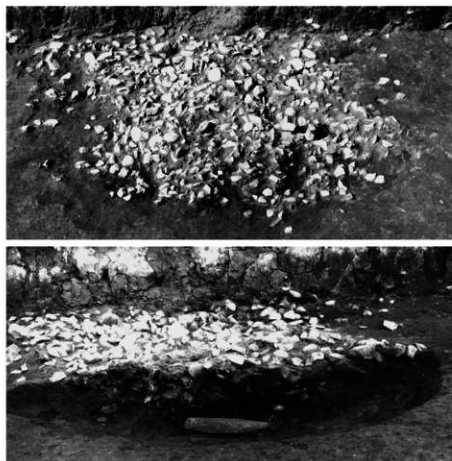
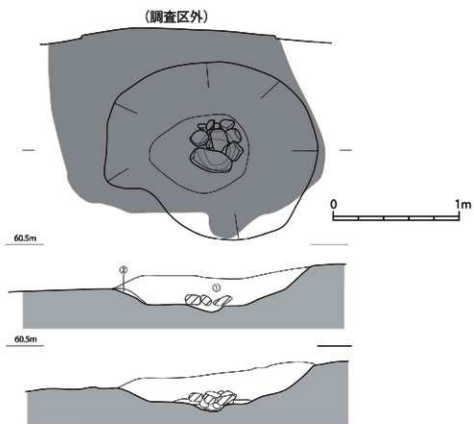


図 11 縄文時代早期集石遺構 1 (S=1/30)

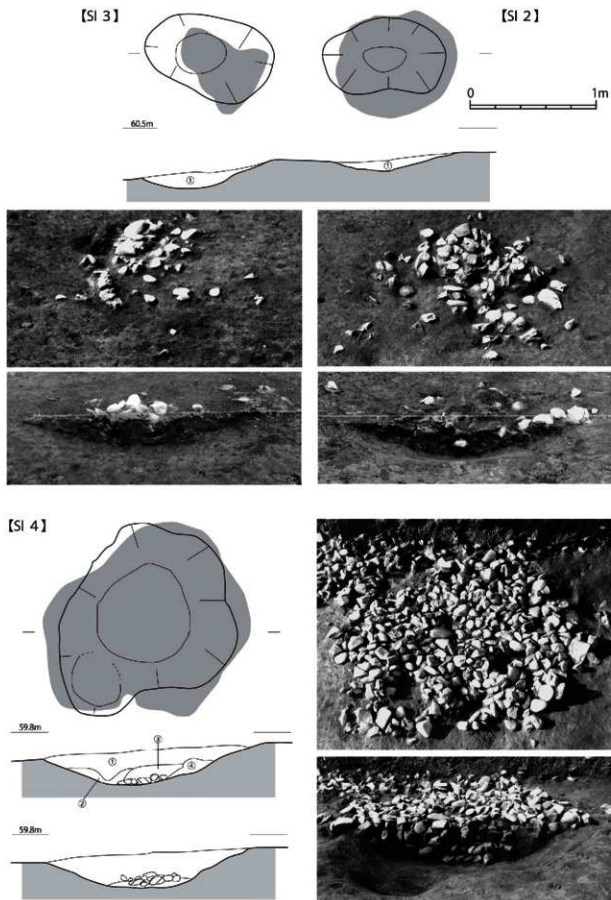
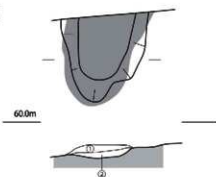


図 12 縄文時代早期集石遺構 2 (S=1/30)

【SI 5】

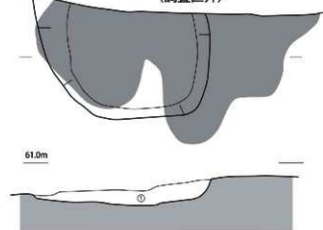


- ① 混土層 45R300 (中大以下の礫)  
 ② 混土層 暗褐色 75R30 黏性弱 しまり中



【SI 6】

(調査区外)



- ① 混土層 暗褐色 75R30 黏性弱 しまり中 中大以下の礫を含む

0 1m

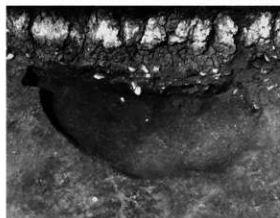
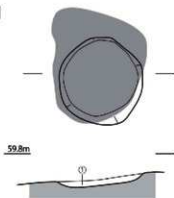


図13 縄文時代早期集石遺構3 (S=1/30)

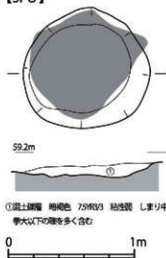
【SI 7】



① 混土層 暗褐色 75YR3/3 粘性弱 しまり中 礫を以下の層を含む。

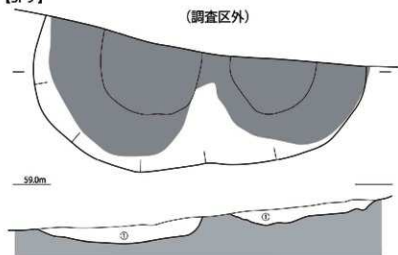


【SI 8】



① 混土層 暗褐色 75YR3/3 粘性弱 しまり強  
礫を以下の層を多く含む

【SI 9】



【SI 9】

① 混土層 暗褐色 75YR3/4 粘性弱 しまり中 礫を以下の層を多数含む。

【SI 1】

① 混土層 黒褐色 75YR2/2 粘性弱 しまり強 白色粒を含み、礫を以下の層を含む

② 土層 暗褐色 75YR4/3 粘性弱 しまり強

【SI 2】

① 混土層 黒褐色 75YR2/2 粘性弱 しまり強 礫を多量に含む

【SI 3】

① 混土層 暗褐色 75YR3/3 粘性弱 しまり中 礫を多量に含む

【SI 4】

① 混土層 黒褐色 75YR2/2 粘性弱 しまり強 白色粒を含み礫を多量に含む。

② 土層 暗褐色 75YR3/3 粘性弱 しまり強 礫含まず

③ 混土層 礫は礫以下。

④ 土層 暗褐色 75YR3/3 粘性弱 しまり強 礫含まず

図 14 縄文時代早期集石遺構 4 (S=1/30)



【S10】

- ① 凝土構築 黒褐色 10R02 粘土中 しまり強 最大以下の高さした礎を部に含む
- ② 凝土構築 黒褐色 10R02 粘土中 しまり強 最大以下の礎を礎らに含む、炭粒を若干含む
- ③ 凝土構築 黒褐色 10R03 粘土中 しまり強 最大以下の礎を礎らに含む（2層より多し）、炭粒を若干含む
- ④ 土質 黒褐色 10R03 粘土中 しまり強 炭粒を若干含む

【S11】

- ① 凝土構築 黒褐色 10R04 粘土中 しまり中 最大以下の礎を礎らに含む、炭粒が若干混じる

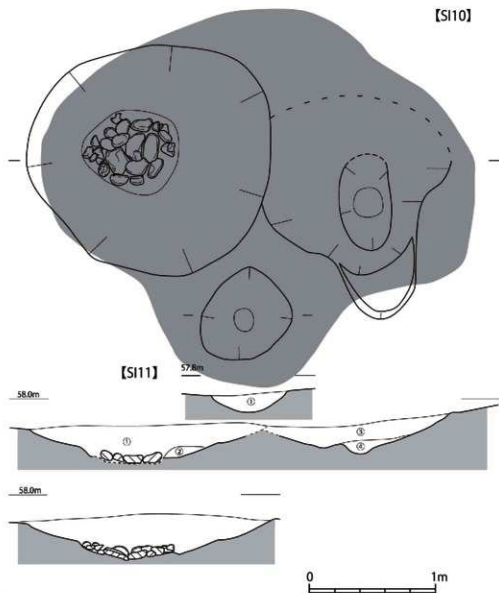
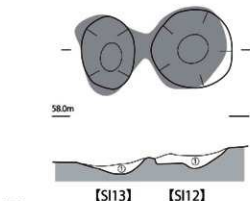


図 15 縄文時代早期集石遺構 5 (S=1/30)



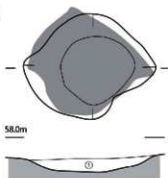


【S12】

① 埴土層 黒褐色 10YR2/3 粘土質 しまり岩  
 學大以下の礫を多く含む。底面は33%を少量含む、埴土あり

② 埴土層 黒褐色 10YR2/3 粘土質 しまり岩  
 學大の礫を数個含む。底面には礫を少量含む、埴土あり

【S14】



① 埴土層 黒褐色 10YR2/3 粘土質 しまり岩 學大以下の礫を疎らに含む

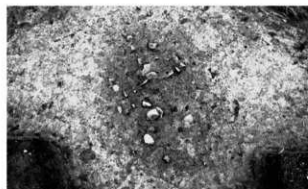


図 16 縄文時代早期集石遺構 6 (S=1/30)

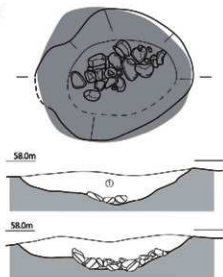
【S10 (図 15)】

S10 は散礫除去後に検出された。検出面における礫の分布は、密な部分と疎な部分があったが、完全に分離することができなかったため、全ての範囲を集石遺構とした。しかし、半截したところ、配石を有する掘込みと配石の無い掘込みが若干重複して存在していたことが判明した。断面観察の結果、これらの掘込みの先後関係は明確ではないが、遺構内部の礫の状況から配石のない掘込みの方が古いと考えられる。配石がない掘込みは底面中央で2段になっており、もう一方の掘込みと構造が似る。また、平面形は円ではなく、浅い凹みが張り出す。

【S11 (図 15)】

S11 はS10調査終了後、全体を掘り下げた段階で検出された。S11の位置は、S10の礫範囲のうち、疎な部分と重複する。このため、S10検出時にS11を認識できなかった可能性が高い。従って、検出層位は一段階古いが、掘込み面はS10とほぼ同じであったと考えられる。S13も散礫除去後に検出された集石遺構より古い層位で検出されたが、出土した炭化材の年代測定結果(第V章参照)から他の集石遺構より新しい年代がでており、検出層位と年代測定結果が一致しない状況を示す。

【S115】



① 黄土層 砂褐色 10R/9 粘性無 しまり無  
 骨大かやや大きい骨を密に含む。厚約10cmの底層を若干含む。



【S116】

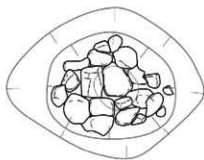
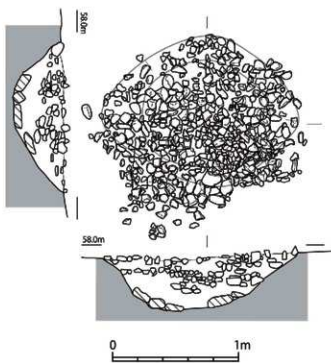
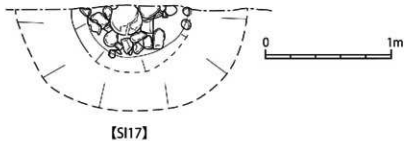
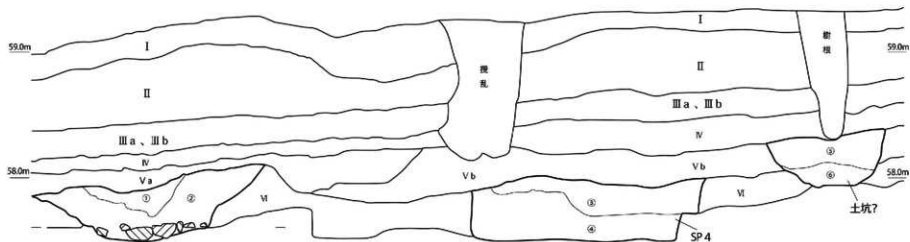


図 17 縄文時代早期集石遺構 7 (S=1/30)



I～VI—基本層序（表2 基本層序）参照）

①[7]

①土層 黒褐色 75YR2 粘性强 し、まじり強 礫含まず、炭粒を多く含む。

②③土層 黒褐色 10YR2 粘性强 し、まじり強 礫大以上の礫を少無、礫大以下を多少に含み、炭粒を多く含む。

④[4]

④同 ④[4] ④と同

⑤⑥[4] ⑤[4] ⑥と同

[土坑7]

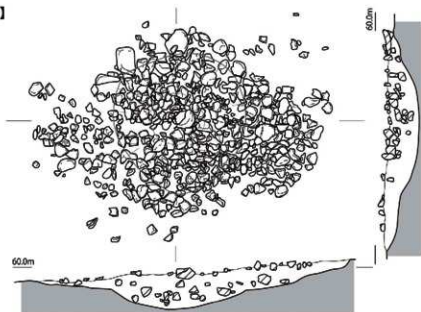
⑤土層 暗褐色 10YR34 粘性强 し、まじり強

⑥土層 黒褐色 10YR2 粘性强 し、まじり強 炭粒多し。



図 18 縄文時代早期集石遺構 8 (S=1/30)

[S118]



[S123]

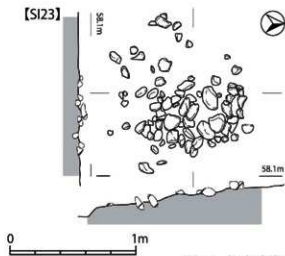
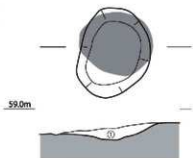


図 19 縄文時代早期集石遺構 9 (S=1/30)

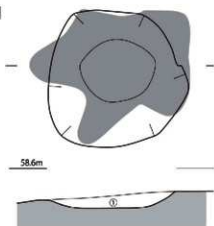
【SI19】



① 凝土構築 彩色 75/R34 粘性弱 しまり中 最大以下の深さを取捨含む。



【SI20】

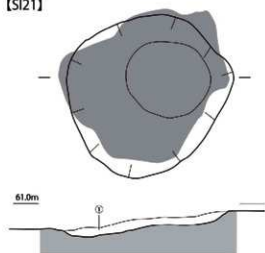


① 凝土構築 彩色 10/R44 粘性無 しまり強



図 20 縄文時代早期集石遺構 10 (S=1/30)

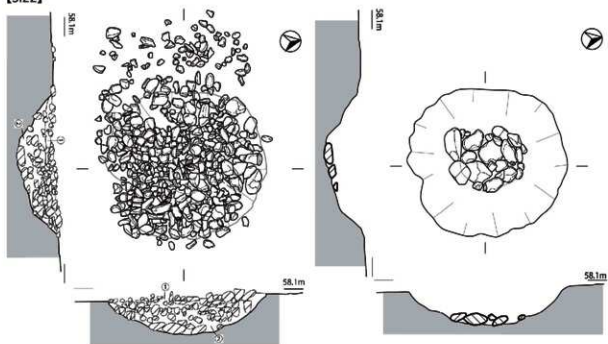
【SI21】



① 遺土層 暗褐色 10RB4 磁石無 しまり強 最大以下の層3層を含む



【SI22】



① 遺土層 主に黄褐色 10RH3 磁石弱 しまり強 炭化物を少量含む  
 ② 遺土層 暗褐色 10RB3 磁石やや強 しまり強 1cm以下の炭化物を含む

0 1m

図 21 縄文時代早期集石遺構 11 (S=1/30)

【SI24】

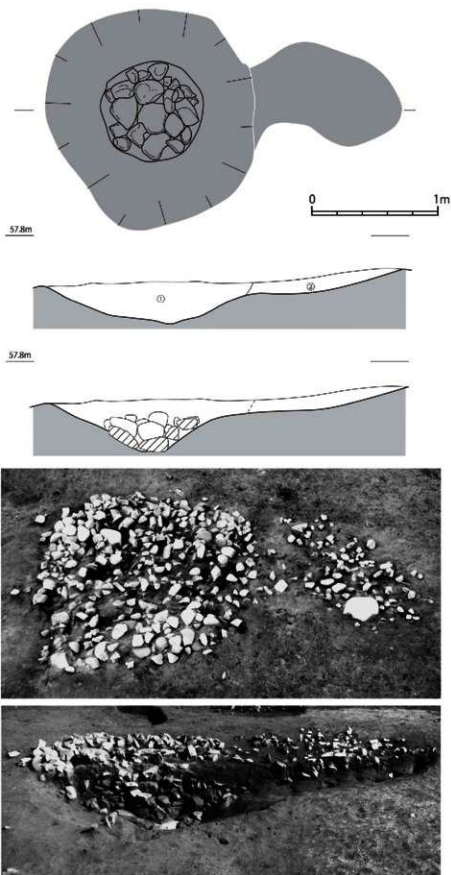


図 22 縄文時代早期集石遺構 12 (S=1/30)



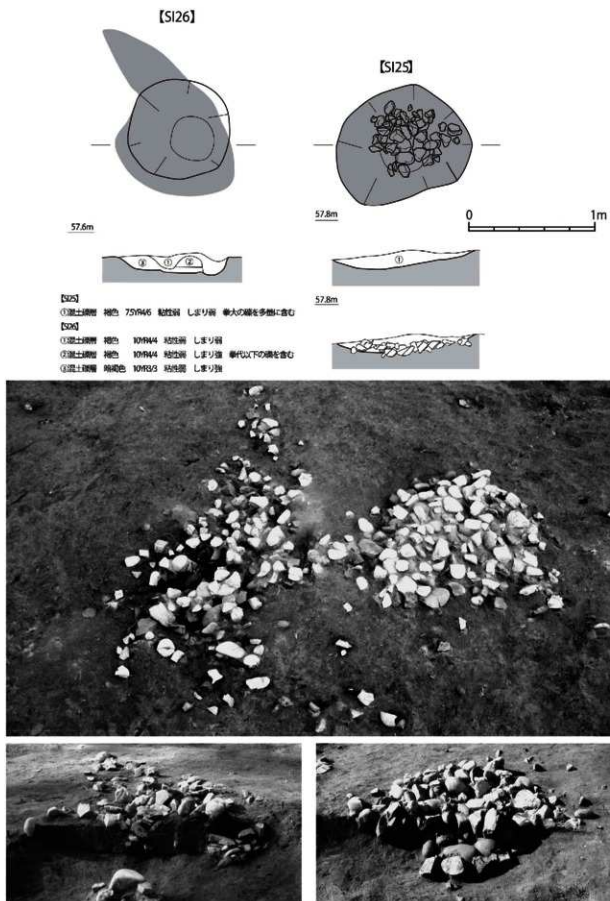
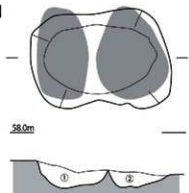


図 23 縄文時代早期集石遺構 13 (S=1/30)

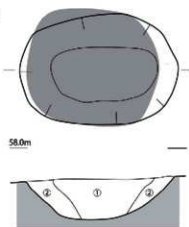
【SI28】



- ① 混土層 暗褐色 10YR2/3 粘性强 しまり無 最大大の礫を1個含む  
 ② 混土層 暗褐色 10YR3/4 粘性强 しまり無



【SI29】



- ① 混土層 暗褐色 10YR3/3 粘性强 しまり無  
 最大～人頭大以下の礫を少量含む、小礫を多量に含む、礫の数は多い。  
 ② 混土層 暗褐色 10YR3/3 粘性强 しまり無  
 最大以下の礫を環状に含む

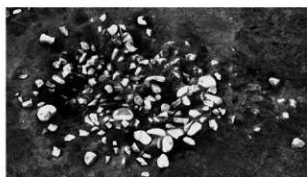
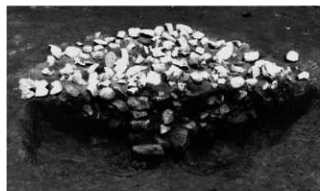
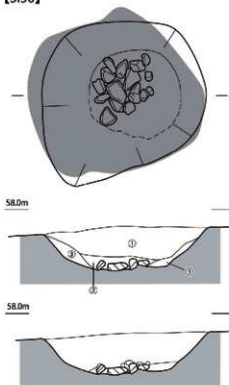
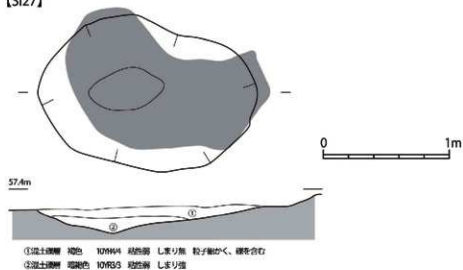


図 24 縄文時代早期集石遺構 14 (S=1/30)

【SI30】



【SI27】



① 混土層 暗褐色 10R45 粘性强 しまり強 粒子細かく、礫を含む  
 ② 混土層 暗褐色 10R35 粘性强 しまり強

図 25 縄文時代早期集石遺構 15 (S=1/30)

【SI4】

① 混土層 暗褐色 10R35 粘性强 しまり強  
 大小様々な礫を含み炭化跡を少量含む  
 ② 混土層 1C 灰・黄褐色 10R43 粘性强 しまり強 礫を少量含む

【SI5】

① 混土層 暗褐色 10R35 粘性强 しまり強  
 礫大以下の石・角礫を多く含む。磨滅し、破砕されたもの多し。  
 ② 混土層 暗褐色 10R35 粘性强 しまり強 礫大よりやや大きい礫を含む。  
 ③ 土層 黒褐色 10R22 粘性强 しまり強 炭化物を含む。礫は含まれない。

【SI2】

① 混土層 黒褐色 10R22 粘性强 しまり強  
 礫大以下の礫を含み、ほとんどが剥脱している。

【SI4】

① 混土層 暗褐色 10R35 粘性强 しまり中  
 礫大以下の礫を含み、ほとんどが剥脱している。

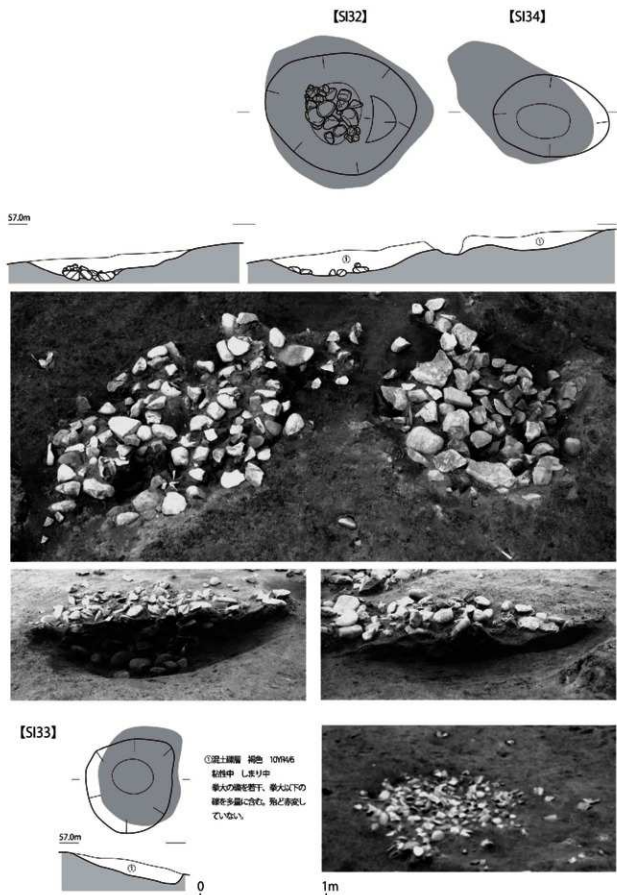
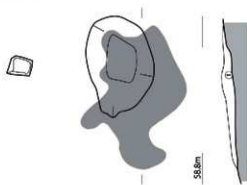


図 26 縄文時代早期集石遺構 16 (S=1/30)

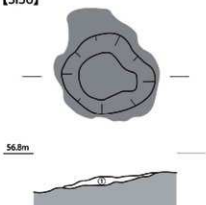
【SI35】



① 遺土微黒 粘性强 しまり無 腐葉多し、半分以上は赤化



【SI36】



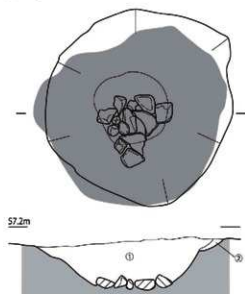
① 遺土微黒 褐色 75YR4/6 粘性强 しまり無 根腐の影響で地山の褐色したが



0 1m

図 27 縄文時代早期集石遺構 17 (S=1/30)

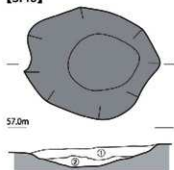
【SI37】



- ① 掘土層 褐色 10M34 粘土中 しまり岩  
 10m 前後の厚化した身障・器内障を併に含む。障の奥は中央部ほど高い。  
 ② 土層 褐色 10M34 粘土中しまり岩 炭化物を少量含む。



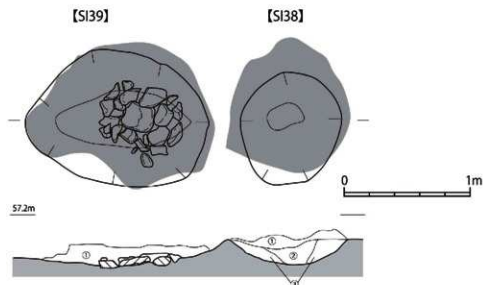
【SI40】



- ① 掘土層 褐色 10M34 粘土や中泥 しまりや中泥 炭化物を僅かに含む  
 ② 土層 褐色 10M45 粘土や中泥 しまり中



図 28 縄文時代早期集石遺構 18 (S=1/30)



【SI38】

① 凝土構築 暗褐色 10F934 粘性無 しまり中 10cm 前後の内周・面内縁を築き含む。50% に比して赤化の度合いが低い。

② 土層 暗褐色 10F933 粘性中 しまりやや不揃 腐敗・焼土粒を少量含む。

③ 土層 暗褐色 10F932 粘性中 しまり中

【SI39】

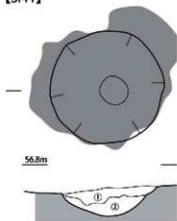
① 凝土構築 褐色 10F946 粘性無 しまり弱 10cm 前後の赤化した菱角縁を築き含む。



図 29 縄文時代早期集石遺構 19 (S=1/30)



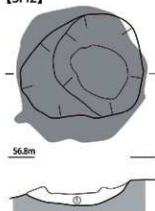
【SI41】



- ① 混土層 褐色 10M3/3 粘性弱 しまり弱 砂を含む  
 ② 混土層 褐色 10M3/3 粘性弱 しまり弱 砂を4割含む



【SI42】

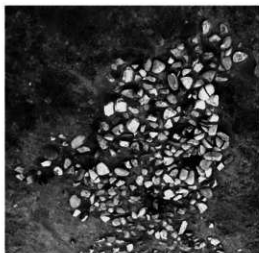


- ① 混土層 褐色 75M44 粘性弱 しまり弱 砂を多く含む。ほとんど赤化。



図 30 縄文時代早期集石遺構 20 (S=1/30)





【S146】

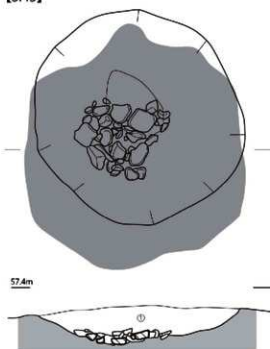


【S145】



【S144】

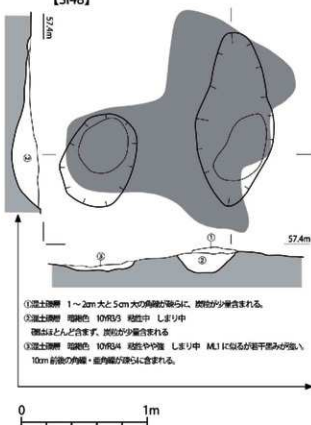
【SI43】



① 炭土遺構 褐色色 10R/3 粘土中 L, しまり器  
5~10m 大の角礫を囲む。5m 前後の小ぶりのものが多い。炭化率は約 50%。  
炭化物を少量含む。



【SI48】

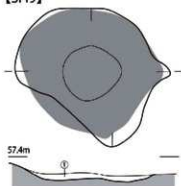


① 炭土遺構 1~2m 大と 5cm 大の角礫が散らばり、炭化が少量含まれる。  
② 炭土遺構 褐色色 10R/3 粘土中 L, しまり中  
器はほとんど含まず、炭化が少量含まれる  
③ 炭土遺構 褐色色 10R/3.4 粘性やや強 L, しまり中 MLIC になるが若干炭化が強い。  
10m 前後の角礫・面角礫が散らばる。



図 32 縄文時代早期集石遺構 22 (S=1/30)

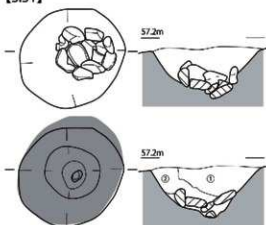
【SI49】



① 混土層 相模色 10R34 粘土中 しまり肌  
10cm以下の角礫・礫身部を雜らに含む。炭化物を少量含む。



【SI51】

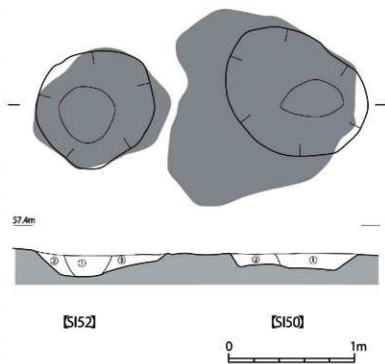
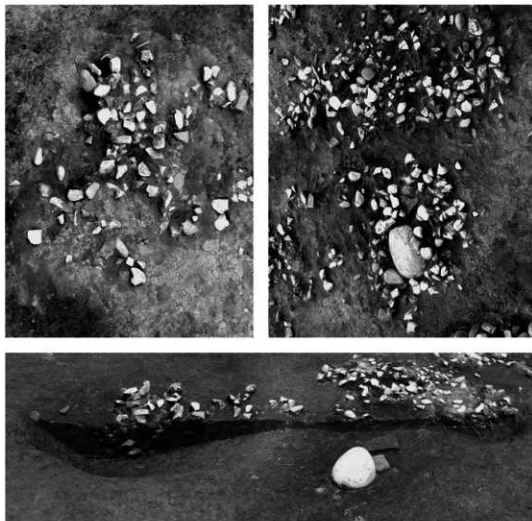


① 混土層 相模色 7S966 粘土弱 しまり肌  
② 混土層 相模色 10R34 粘土弱 しまり肌



0 1m

図 33 縄文時代早期集石遺構 23 (S=1/30)



[S152]

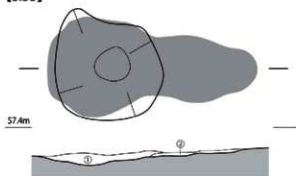
- ① 深土部層 暗褐色 10YR6/4 粘性强 しまり弱 傘大の層を多数含む
- ② 浅土部層 褐色 10YR4/4 粘性强 しまり弱 傘大以下の層を多数含む
- ③ 土層 褐色 10YR4/4 粘性强 しまり弱 硬合せず

[S150]

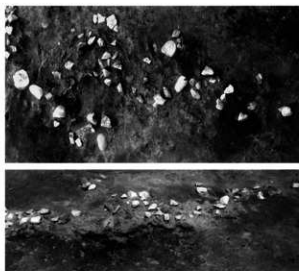
- ① 土層 暗褐色 10YR6/4 粘性强 しまり弱 硬合せず
- ② 深土部層 暗褐色 10YR6/4 粘性强 しまり弱 ①層よりやや硬。傘大以下の層を多数含む。

図 34 縄文時代早期集石遺構 24 (S=1/30)

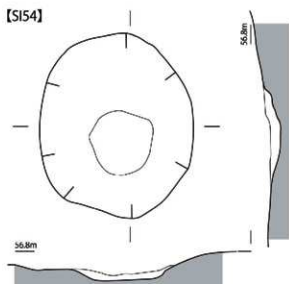
【SI53】



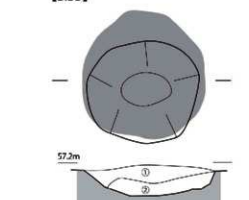
- ① 流土層 褐色 10YR3/4 粘性無 しまり弱 骨大以下の塊状あり  
 ② 土層 褐色 10YR4/4 粘性無 しまり弱 硬なし



【SI54】



【SI55】



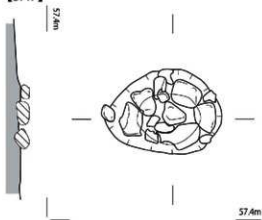
- ① 流土層 褐色 10YR4/5 粘性無 しまり無 角縁を多く含む  
 ② 流土層 暗褐色 10YR3/4 粘性無 しまり無 白色粒を含む



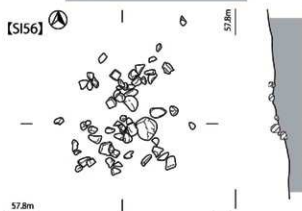
図 35 縄文時代早期集石遺構 25 (S=1/30)



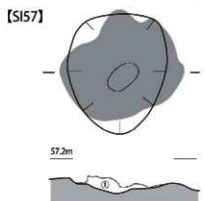
【SI47】



【SI56】



【SI57】

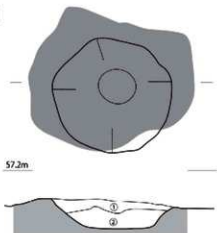


① 塩土強層 塩礫色 75IRG4 磁鉄質 L.S.V.質 準火成岩集合体



図 36 縄文時代早期集石遺構 26 (S=1/30)

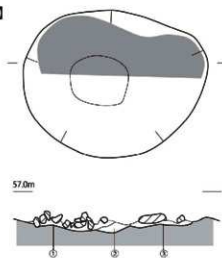
【S158】



①流土層 褐色 10PB4 粘性弱 しまり強 礫を含む土層4枚。  
②流土層 暗褐色 10PB4 粘性弱 しまり強 礫大以下の礫を含む。



【S159】



①流土層 褐色 75PB4 粘性無 しまり強  
φ4m 大の礫が密集しており、一部破壊している  
②土層 褐色 75PB4 粘性無 しまり無 礫なし  
③流土層 褐色 75PB4 粘性無 しまり無  
若干土が散らかり、φ5～10m 大の礫が礫らに食まれる

0 1m



図 37 縄文時代早期集石遺構 27 (S=1/30)

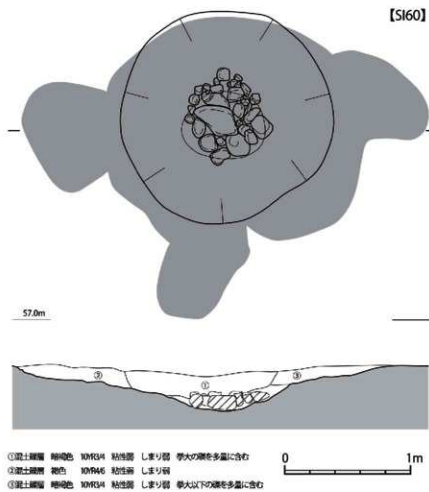


図 38 縄文時代早期集石遺構 28 (S=1/30)

【S161】

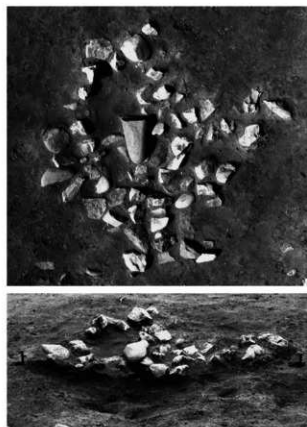
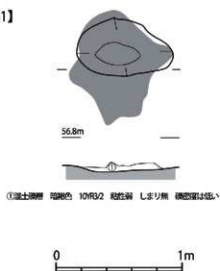
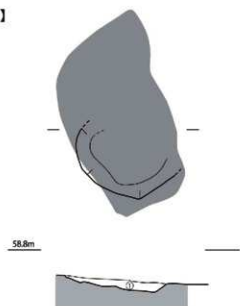


図 39 縄文時代早期集石遺構 29 (S=1/30)

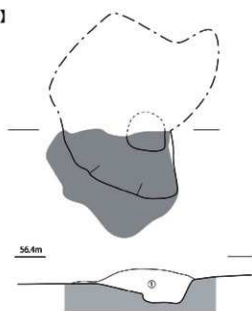
【S162】



① 灰土層 褐色 75YR4/6 粘性弱 しまり弱 礫および土との境界



【S163】

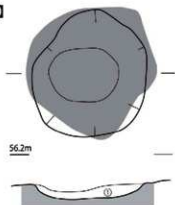


① 灰土層 褐色 10YR4/6 粘性弱 しまり弱 上部に特大の礫を含む



図 40 縄文時代早期集石遺構 30 (S=1/30)

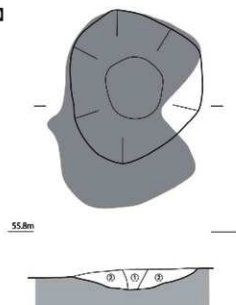
【SI64】



① 土質 黄褐色 10R46 粘中 しまり強  
 湿り気あり。最大の礫を3個、最大以下の礫を少量含む。



【SI65】



① 土質 黄褐色 10R56 粘中 しまり強 硬さまず  
 ② 土質 黄褐色 10R46 粘中 しまり強 硬さまず

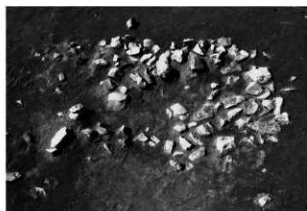


図 41 縄文時代早期集石遺構 31 (S=1/30)

### 3 炉穴

今次調査では炉穴が7基検出された。SP 1・SP 2はB5c区、SP 3はB5b区とB5d区の境界線付近、SP 4・SP 7はD4c区、SP 5・SP 6はC5a区に位置する。これらは調査区北辺、即ち、尾根中央付近の平地もしくは緩斜面に立地する。

#### 【検出】

確認調査では、集石遺構は検出されたが、炉穴は検出されなかった。しかし、炉穴は平地と斜面地の両方に構築される例があるため、調査区全面で炉穴の確認をする必要があった。まずGeG以东の斜面地においてトレンチ3本を概線に沿って設定し、炉穴の検出作業を行ったが、遺構・遺物とも確認されなかった。次に平地地は、集石遺構がない場所で遺構精査を行った後、全体を掘り下げて検出作業を行った。また、集石遺構の調査が終了した場所でもトレンチをあげ、炉穴の検出作業を行った。

#### 【調査方法】

炉穴の検出後、長軸に沿って半截し、断面図を作成した。しかし、作業工程や検出時の掘削深度によっては写真記録のみのものがある。重複する炉穴については、検出面で先後関係を判断し難く、断面観察によって判断した。出土遺物と際については原位置を保った状態もしくはそれが判定できる状態のものなかったため図化していない。

#### 【SP 1・SP 2 (図 42)】

SP 1とSP 2はB5c区に位置する。重複しており、断面観察の結果、SP 2がSP 1に先行する。両者ともに長軸は東西方向であり、SP 1が若干北に振る。長軸は地山の傾斜と並行する。

SP 1は長軸1.98m、短軸は0.93mを測る。床面は凹みが2箇所あり、西(傾斜の低い方)が浅い。埋土は黒褐色の硬質土で炭粒と礫を若干含むが、明瞭な焼土の堆積はみられなかった。また、埋土中から土器(図 50-17)が出土した。

SP 2は長軸3.36m、短軸推定0.8mを測る。SP 1に切られているため、東端と西端が残っていたが、東端付近はSP 1より深く検出面からの深さは約0.6mである。西端は深さ約0.1mで浅い。埋土はSP 1とさほど変わらない。遺物は出土していない。

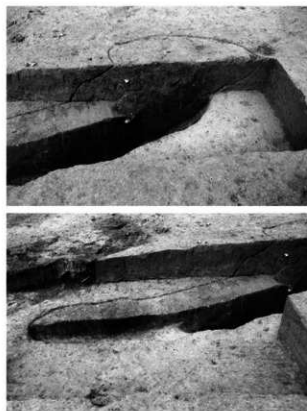
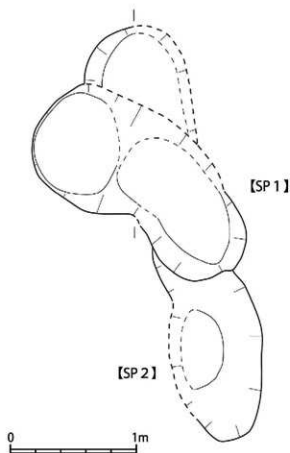


図 42 縄文時代早期炉穴 1 (S=1/30)





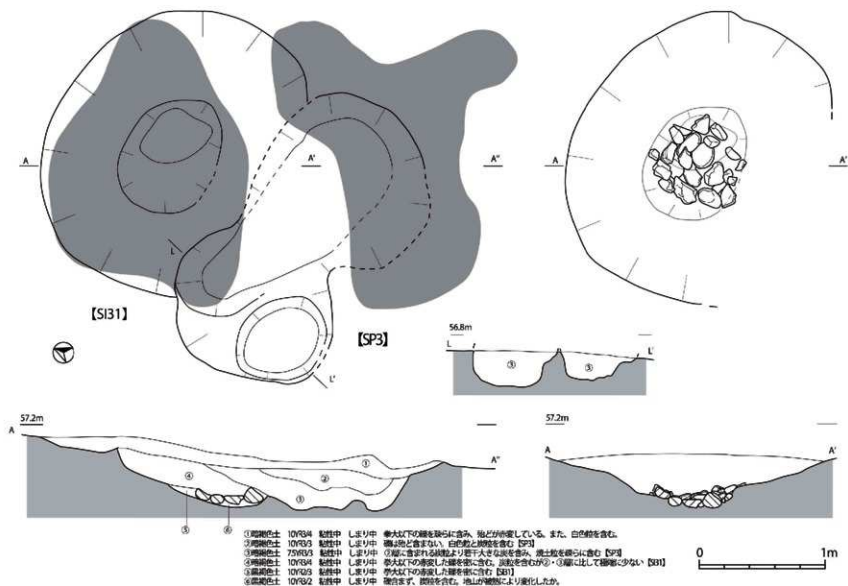
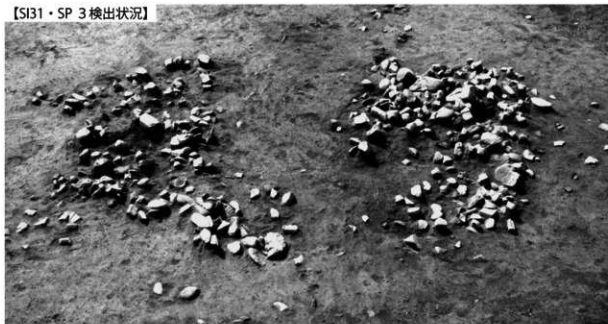
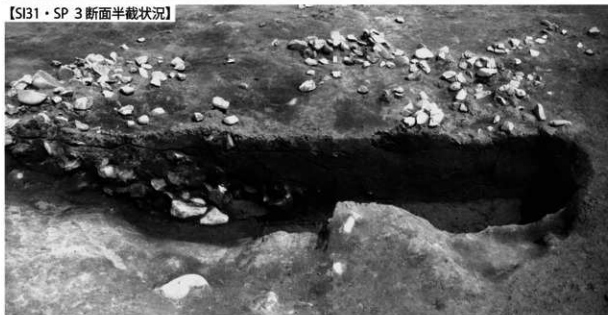


図 44 縄文時代早期炉穴 3 (S=1/30)

【SI31・SP 3 検出状況】



【SI31・SP 3 断面半截状況】



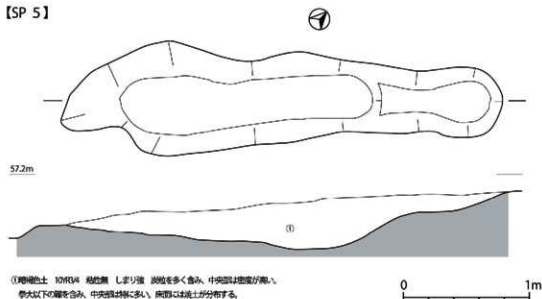
【SI31 (図 44)】

当初、SI31は礫のまとまりが2箇所認められたため、集石遺構2基が近接して存在していると考えられていた。しかし、両者を結ぶ長軸に沿って半截したところ、集石遺構が別の遺構(SP3)に切られている状が判明した。即ち、まずSI31が存在し、次にSP3がSI31を半分破壊しつつ構築されたようである。そして、SP3が埋没する過程の最終段階にSI31由来の礫が土とともに堆積したと考えられる。SI31の配石と検出された礫の間に土が間層として入っていることもその証左といえるであろう。

【SP 3 (図 44)】

SI31の東側を切る形で存在する。長軸は南北方向からやや西に振っている。長軸は2.49m、短軸は1.38mを測る。深さは南側が約0.3m、北側が0.76mで、北側が深い。北側には窪みが二箇所あり埋土に炭化物と焼土粒が認められた。焼土の層はなかったものの灰の可能性があるといみられる。

【SP 5】



①埋土土 10F04 粘土質 しまり強 炭粒を多く含む、中央部は密度が低い。  
脊大以下の層を含み、中央部は特に多い、床面には灰土が分布する。

【SP 6】

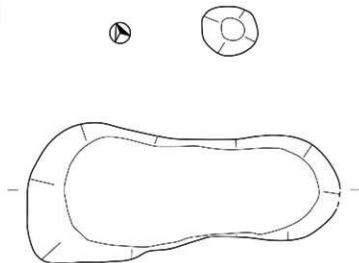


図 45 縄文時代早期炉穴 4 (S=1/30)

【SP5 (図 45)】

SP5 は長軸が南北方向からやや東へ振る。長軸は 3.48 m、短軸は 0.9 m を測る。床面は図の右側が 2 段になっており、左側に向かって徐々に浅くなる。埋土は単層ながら、焼土粒と炭粒を含んでおり、また、床面の最深部は土がやや赤変しており、火を焚いていたと考えられる。なお、SP5 の図上右端は S26・S27 と、図上左端は S31 と若干重複するも、先後関係は不明である。

【SP6 (図 45)】

SP6 は長軸がほぼ東西方向である。長軸は 2.49 m、短軸は 1.11 m を測る。深さは図上右端で 0.4 m、左端で約 0.2m を測る。埋土は単層ながら、焼土粒と炭粒を含んでおり、また、床面の最深部は土がやや赤変しており、火を焚いていたと考えられる。重複する遺構はない。SP6 北側に浅い土坑があったが、SP6 との関係は不明である。

【SC 3】

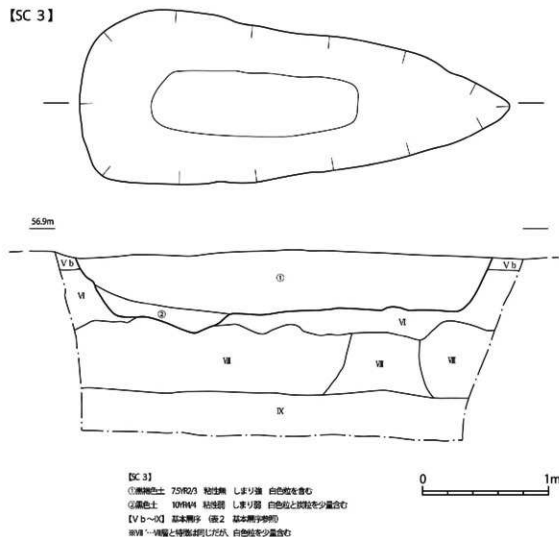


図 46 縄文時代早期土坑 1 (S=1/30)

#### 4 土坑

【SC 3 (図 46)】

SC 3はObd区に位置する。SI58・SI59の調査後に全体を掘り下げたところ、V b層中から検出された。層位的にはSI58・SI59の下に位置するか先後関係は不明である。また、埋土中から炭粒や焼土粒が顕著に認められなかったため、カマ穴の可能性は低い。

SC3を大きく断ち割ったところ、VII、VIII層が検出された。VII・VIII層は調査区内に普遍的に見られる層ではないが、調査区南側の斜面付近でのみ確認される。VIII層下部には軽石状の粒が多くみられたため一次堆積層であると認められる。

【SC 1・2 (図 47)】

SC 1とSC 2はGrEとGr. 4の交点付近に位置する不定形の土坑である。両者ともに埋土の質は似ているが、若干色調が異なる。埋土中に少量の炭粒を含むが焼土粒は認められない。時期を示す遺物が出土していないため、時期判定は難しいが、IV層下部からVa層(散礫)上面付近で検出されており、集石遺構と何らかの関係があると考えられる。